

---

# 戦闘機人物語

ウィンダール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦闘機人物語

### 【Nコード】

N9927T

### 【作者名】

ウィンドール

### 【あらすじ】

何故俺がこうなったのかわからない

俺はどうやって死んだ？

理由もわからないまま俺は神の遊び道具（神の駒）としてリリカルなのはの世界に転生させられた  
俺は原作メンバー達と違いミッドで生まれ育った  
そしてある日俺は……

12月12日 注意書き追加（前書き）

主人公の能力のネタバレになってしまうので何話か見た後で見てください  
お願いします

## 12月12日 注意書き追加

表にでろ。俺は出ないけど様から御指摘を頂いたので注意書きを書かせていただきます

今回の主人公のトレディチの持つ能力の「境界を操る程度の能力」  
なのですが、作者自身が勝手な見解で能力を思い違いをしていました  
私はてつきり隙間使ったら別空間に行つて其処から他の空間に行く  
のだと思つていましたが、よくよく見てみるとその場から直接行き  
たい場所に繋げるものでした

現在地）↑弄つて？げる（↓目的地

というものです

しかし、今更その設定を変えてしまうと大幅な修正をしてしまい、  
話の内容が変わってしまう恐れがありますのでこの作品に関しては

現在地―↓謎空間↓移動↓―目的地という風に出来る能力にさせて  
頂きます

なので其処のところ御理解いただけたら、この作品を今後とも読ん  
でいただきたいと思います

どうしても「無理、変えて」と言う方がいたのなら謝ります  
ですが、作品の方向性等が変わってしまう恐れがございますので変  
えるつもりはありません

本当に申し訳ございませんでした

12月12日 注意書き追加（後書き）

やらかしてしまいました

今度から能力に関しては何事も調べてから使って生きたいなと思います

## ぶろろーぐ（前書き）

はじめましての方は初めまして

ISの小説で見てくれた方はまた私の小説見てくれてありがとうございます^^

ウィンドールと申します

これからがんばって書きますのでよろしくお願いします

ぶろろーぐ

突然だが俺は死んだ

偶々だが飛行機に乗っている最中にハイジャックが起きてそのまま自爆テロ

関係ないのに巻き込まれた

俺は留学の為に飛行機に乗ったのにこんな事に遭うなんて・・・

そして、今俺の前には神を名乗るものが居る

元々俺は神を半分信じていたから目の前に出たとき神々しい輝きを感じた

そして、神は俺に言った

「今他の神と賭けしてるんだよね、だからさ、そのための駒になつてよ」

言ってる意味が解らない

何？どういうこと？

「混乱してるようだな。説明は転生した後紙で教えてやる、取り合えず逝け」

へ？何？どういうこと？転生？はっ？

「ああ、そうだ、忘れてた。この札から3つ選べよ」

俺の目の前に40枚位の札が展開された

が、俺にはそんな事より今の事を把握する方がやっつとである

数秒間の間俺はフリーズ状態で神はそんな俺に気が付き顔面を叩いた

「イツテエ!!」

「何をしてんだ？早く選べ」

「えっ？あ、はい」

俺に向かって喋っているのにきずき焦って俺はテキトウにカードを選んだ

「……うわ、他の神がテキトウに考えたこのカード引くとか……まあコレは勝ち決定かな!!よし」

なんなんだ……今の俺の立っている立場が未だにわからないぞ？  
どうしたらいいんだ？

「まあ、お前はただ本能の赴くままに生活すればいいんだ」

俺は死んだんだぞ？これから生活できるわけが

「出来るんだよ、詳しくは後だ。じゃあな」

突然俺の真下に穴が出来て落ちた

その後俺は気を失った

## ぶろろーぐ（後書き）

テンプレな感じに死にましたけど・・・まあコレが手っ取り早い  
し簡単なんですよ

それに下手にテンプレじゃない風に行くと変な風になると予想しま  
したのでこんな感じになりました。

ん？いきなりか・・・（前書き）

連投です

ん？いきなりか・・・

こんにちは

俺は気が付いたらこの世界にいた

此処はミットチルダと言う場所

そう、この世界はりりなのの世界だ

それに気が付いたのは“この世界”の親が魔道師と名乗った後に俺にデバイスを俺を見せてきたのがきっかけだった

その後俺は想像もなかった羞恥プレイを受け長い年月を耐え凌ぎ今は10歳だ

今頃なのは原作は始まっているんだろう

後、俺は5歳頃に部屋で手紙を発見してその中身を見たときに何故俺はこの世界に来たのかを確信した  
それは俺が“神の駒”になるためだ

そう、奴は俺を遊びのためにこの世界に送ったと書いてあった  
それも賭けである  
そんなの直球に言われてハイそうですか、何て言えるほど俺の神経は野太くない

それにこの世界に来る前に奴は”他の神”とも言っていた  
と言うことはこの世界には俺以外にも転生者が居る可能性がある  
そいつ等は今どこで何をしているかはわからないが、予想ではどうせ原作介入でもしているんだろう

俺は神の駒にはなりたくないし、この場所なら介入する可能性もあり無いだろう  
まじラッキーだな

あと、神が俺に書いた紙には俺が選んだ札に書いてあった能力が書いてあった

それは

1、東方の八雲紫の境界を操る程度の能力

これは東方ファンの俺としては嬉しい限りだ

2、最初っからそれなりの力とそれなりの不幸を持って転生

これが意味が解らないそれなりの力持って転生するのは嬉しいんだが不幸のスキルはいらないぜ

そしてコレが最後

恐らくあの時神が勝ったとっていた由縁なのだろう

3、転生者の神に与えられた力を消す能力（一定範囲内のみ）

コレは転生者に対しては絶大的な力を持つだろう

だが、俺には戦闘できるスキルは無い

境界を操る程度の能力はかなり強い、だが、コレは戦闘向けではなくどちらかといえば幻術的なものだろう

だから、もし他の転生者が完璧に原作主人公達を仲間にしていたら俺には打つ手が無い

はつきり言っただけのはやフェイトに勝てる程の才能は無いと思う

二つめのスキルは最初っからと言っても何れは手にする力が速く手に入っただけの事

限界はある

そう考えると今俺が置かれている立場は厳しい

それに何故か解らないが今の俺には一つ目の能力の境界を操る程度の能力が使えない

意味が解らない

わざとなのか、それともミスったのかは解らないが結局使えないこ

とは変わらない

どうしようもない為俺は現在来るべき対戦（転生者との）の為に親に訓練してもらっている

親は筋がいいと俺を褒め飴を渡しながらしっかりと練習では鞭を振るう親

親は今は管理局を引退しているが昔はエースと言われてる程の実力を持っていたらしい

そんな親に俺はこれから週に何回かのペースで鍛えてもらっている

- - - - 4年後 - - - -

はい、長い間俺は親に鍛えられてましたよ  
ん？時間たつのが早い？気のせい気のせい

俺は今14歳、未だに境界を操る程度の能力の力が使えない  
その為俺は完璧にその能力を無かったものにして鍛えてきた

後、此処数年の間になのはやフェイト、はやての話を何回か聞いた  
あと、“他”のやつらの話も

そいつ等はなのは達と同じ鳴海出身で皆同じような道を進んでいる  
らしい

それも全員エースと言われるほどの実力を持っているらしい

恐らく転生者だ

まあ、転生者かどうかは俺の3つ目の能力で簡単に判断できるから  
そのうち確認でもしに行くかな？

あ、今俺はミッドチルダの管理局本部に向うためにバスに乗っている  
理由は社会見学

うちの学校は毎年二年生になったら管理局を見学しに行っているら

しい

親には恐らく其処に勤めるようになるからしつかり見とけと言われた  
勤めるきはないけどな

そんな事を考えていると急に世界が揺れた

いや、バスが揺れたのだ

何事だと思っていたら右側から女の人が飛んできた

俺はその顔に見覚えがあった

原作キャラの“ナンバーズのトーレ”だ

何でこんなところに？こいつ等はレリック目当てでいろんな所を襲  
ってるんじゃないのか？

何でこんなバスを襲うんだ？

・・・まさか！！

俺はこのバスの中にレリックがある事に気が付いた  
急いでこの場から逃げようとしたがバスの中

逃げ場があるはずが無い

その瞬間目の前が光に支配された

俺は短くして第二の人生を幕を閉じてしまったのだ



ん？いきなりか・・・（後書き）

まあ、死にましたね・・・

これからご都合主義があるんでそこよろしくお願いします

^^

さて、どうしましょうか・・・（前書き）

また連投です

この小説はサブ的な感じで書いているんでISの方メインでかいて  
偶にこっち書く程度なので不定期でいつ投稿するかわかりません

ご了承ください

さて、どうしましょうか……

此処は……俺は……死んだんじゃないのか？

俺は確かバスで……トーレに殺されたんだ……

でもなんで俺は生きているんだ？

死んだはずなのに……

「おお、目覚めたかトレディチ」

トレディチ？俺はそんな名前じゃない

てか、トレディチって確かイタリア語で13って意味なはず……

まさか！！俺戦闘機人に成っちゃったのか！？って息が！？息が苦しい……

水の中！？てか何で俺は水槽の中に！！苦しい！！助けて！！誰でもいいから！！

「うーん、まだ調子が駄目なのか？いや、大丈夫なはずなんだが……まあいい取り合えず出すか」

目の前の人間が俺と反対側へ向かって歩く

おい！！何処行くんだよ！！俺が此処にいるのに！！苦しいのに！！

人間は俺の方をチラッと見た後にコンピューターをいじった

俺はもう駄目かなと思ったときに水槽の中の水がどんどん少なくなっていくのを感じた

急いで俺は空気が出来た部分に口をだし息を整えた

「初めましてかな、トレディチ。私は君の親だよ」

「……コイツが親……ってよく見ればスカリエツティじゃないか、俺本当に戦闘機人になったのか？」

「私がわかるかい？」

ああ、十二分に解るぜ。嫌なくらいにな

「解ります、マスター」

「マスターか、今のところ娘達にはそんな風には言われた事が無いから新鮮な感じがするね」

「マスター、私は何をすればいいので？」

「そうだねえ……まずは性能を見せてもらおうかな、相手はト  
ーレでいいかな？」

「了解です」

行き成り自分の敵と戦<sup>カタキ</sup>うのかよ

全く理不尽だな

そつえば戦闘機人にはISがあるけど俺にはあるのかな？

「マスター、私のISって何かわかりますか？」

「それが、大抵なら君達を作る過程で解るんだけど……君の場  
合未知数だね、よくわからないんだ」

「そうですか……」

どうしよう……ISも解らないでトーレと戦う何て危なすぎるぞ……

「さて、行こうか」

「了解です」

なんだろう？マスターの命令には逆らえないっていつか逆らいたくないって感じがするんだよね  
生んでくれた親つてのが当てはまるのかな？そんな感じがするから逆らいたくない

- - - 移動中 - - -

現在トレーニングルームの前  
其処にはトーレとチンクがいた

「紹介しよう、今日から私達の家族のNO・13トレディチだ」

「よろしくお願いします」

一応紹介されたので頭を下げておいた

「ああ、よろしくな。私はチンクだ」

うわちっさ、さすがチンク、ちっさい

「失礼な事考えなかつたか？」

「いえ、全然。それより、よろしくお願いします」

鋭いな、チンク鋭いな  
まあ、別にいいんだけど

「トーレ、お願いがあるんだが」

「なんですか？」

「この子の性能が知りたいから戦ってくれないか？」

「解りました」

そつ返事してすぐさま俺の方に体をむけ素手を俺の方に向けてきた

確かトーレは腕からブレードを出して高速戦闘をする人

確かISの名前はライドインパルス・・・拘束移動能力なはず

腕からブレードを出していないってことは・・・俺を舐めているのか  
なら、ぶっ飛ばしてやるだけだ！！

スカリエッティとチンクが外に出てスカリエッティの近くにはナン  
バーズのウーノが控えておりデータ収集の準備をしている

数秒たった後にスカリエッティがマイクを手にして俺等に向かって

「それでは開始してくれ」

開始の合図をした

「先攻はお前にくれてやる、何処からでも掛かって来い」

まあ、俺は一応何年間もエリートのお願ひしてないのに特訓されたからな  
それなりには強いぞ？

「では、行きます」

まずは、小手調べかな？

テキトウな場所を殴る

が、当然の通りトーレは俺の攻撃を防ぐ

少しずつフェイントを混ぜて手数を増やし少しずつ攻めていく

トーレはそれに気が付いたのか顔色を少し変えて俺から離れた

「少しは出来るようだな」

「こう見えても昔鍛えていましたので」

「そんな華奢な体でか」

華奢は余計だ

俺だっけなりたくなっただけではない

「では、少し本気をだしていくぞ!!」

トーレの目は先程と違い完全に戦う目になって俺の方へと急接近してきた

だが、そんなスピードは母……いや、元母親の方が早かったから見極めれる

俺も人外に近づいてきているのか？そんな不穩が漂う

トーレは俺を誘っているのか解らないが甘い手の中に確實殺す攻撃を入れてくる

だが、そんなの日々体感していた俺にとっては造作も無いいなしていく

「ふっ、まともに動けるようだな……ならば、少し本気を出させてもらおう」

そういつて腕の部分に虫の羽に似たエネルギー翼「インパルスブレード」を展開した

オイオイ、俺は未だ固有武装も知らない奴なんだぞ？ヨチヨチ歩きが出来そうな赤ん坊と言っても過言ではないぞ？つとお！！スピードもさつきとはかなり違うな！！

だが、かわせない速さではない！！

トーレは訓練室をいっばいに使いジグザグに動いて確實に攻撃してくる

俺は武器が無い為確實に一発でしとめるためココゾと言うタイミングを待ちながらカウンターを狙っている  
それが20秒位続き、やっと隙が出来た！！

俺は其処にカウンターを入れるためトーレの腕を掴んだ

間接を逆にまげて首に手をかざそうと動くが、トーレはとっさの判断で腕を？まれたときに足を俺の頭目掛けて振った

流石にそれを食らうと一発K.Oなので俺は腕を放しトーレの背中を思いっきり蹴った

トーレは勢いを殺さずそのまま手を地面につけて手で地面を払い地面に足をつけた

「・・・・・・・・」

一瞬の攻防でお互いが黙る

この時俺とトーレは気が付いていないが、スカリエッティ達は哑然としている

何故なら俺は稼動したばかりなので筋肉などが緩んでしまっている完璧ではないのだ

それ何なのにナンバーズで一番強いトーレと“今の所”互角なのだ何故、今の所かと言うとまだISを発動していないからだ

トーレのISは高速移動、普通なら目で往古とも出来ない速さ

だから、ナンバーズ同士だとしてもトーレが強い

だが、トーレはそれ以外にも戦闘面や頭においてもどれも優秀な為一番強いのだ

そのトーレが幾らISを使っていなくとも互角なのだ

それはスカリエッティ達にとって想像もしていない事だったのだ

トーレは蹴られた後笑った

面白いから笑ったのではない、嬉しくて笑ったのだ

戦いが楽しくて笑ったのだ

コレが戦闘狂である

「はっはっは！！トレディチ！！お前、かなり筋がいい！！恐らく鍛えれば私以上だ！！」

「ありがとうございます」

「そんなお前には本気を出そう。本当は出す気はなかったんだが・・・気が変わった！！私はお前を全力でつぶす！！」

「なら私は逃げますよ、全力で」

そんな事言っただが逃げ道は無いので戦う格好をしている

が、内心かなり焦っている、理由はIS何かを使われたらカウンタ  
ーも出来ない程の速さになるだろうからだ

今の俺には打開策は無い・・・固有武装さえ見つけられれば変わった  
かもしれないが・・・今更何を言っても仕方が無い  
腹を括りますか

「ライドインパルス!!」

一々叫ばなきゃ発動できないんですか？全く

それにしても常人ならこのスピードは追いつけないだろう

俺はかるうじて目では追いついている

だが、何故か体が追いついていない、体が反応出来ていないのだ

コレでは戦う事すら出来ない

中止を求めようとするが、あの人は確か戦闘狂・・・中止は無理かな

さて、どうしたものか・・・

幸い完全に動けない訳ではないから他所動いて急所は外している

どうにか打開策は無いのか・・・俺に仕えるISを・・・

そつえば、そつえばなんだけど今使えないかな？昔っから使え

ないあの神に貰った能力……

隙間……やってみるか

あの八雲紫が出していた隙間を……イメージするんだ……俺！！  
出る！！

目の前に紫色の空間とその中に無数の目玉が出てきた

来た！！隙間だ！！

コレは仕組まれていたのか……あの神最初っからこうする為に  
使わせなかったんだな……この野郎  
まあ、今はこの中に逃げよう

トーレは今では攻撃していない  
理由は簡単、目の前に出てきた気持ち悪い空間に目も持ってい  
かれない

俺はそんな事気にも留めず中に入った  
その後隙間を閉じた

……意外と簡単に出てきたな……隙間……  
てか、きめえ、隙間の中きめえ……  
つかこれからどうしよう……取り合えず意外と外が見れるんだな  
トーレが凄い顔で周り見てる  
声とか聞こえないかな……

トレディチ！！何処行っただ！！返事をしろ！！

ドクター、トレディチの生体反応がありません

——うーん、困ったねえ——

おお、すげえ、隙間すげえ！！  
これは万能だわ

しかもコレ好きな場所に出れるのか

理由は判らないけどどんどん情報が頭の中に入ってくるぞ  
・・・いける、この能力はかなり強い！！

そういえば、この能力って障壁とかも作れるんだよね・・・  
トーレの周りに作ってみますか

おりゃ

——なんだコレは！！う、動けない——

成功！！ヤバイ、楽しいぞこの能力  
さて、この能力について多少判ったからそろそろ出るか

隙間を展開して隙間から出てスカリエッティ達の前に出る

「いやあ、すごい力だね、ISって」

「「「「「！！！！」「」「」「」

おお、皆驚いている

「ん？どうしたんですか？」

「どこから出てきたんだい？」

「隙間から」

「隙間？」

「私のISです、完全にわかった訳ではないんですが隙間を作つて別次元に行つたり障壁みたいなのを作れるみたいです。障壁みたいなのは今トーレに使つてるのです」

「ほう、あれか」

「すごいな・・・下手したら我々の中で一番強いかな。姉としては妹に越されると」

「そういえば、此処ではそういうシステムだったな  
一応まだ知らないという素振りをしておこう  
じゃないと怪しまれる」

「姉・・・とはどういうことですか？」

「ああ、そういえば未だ言っていなかったね、私が数字の低い方を姉、高い方を妹にしたんだよ」

「と言うことは私の上に12人もの姉がいるということですか？」

「そういうことになるかな」

「判りました、ではこれからは姉さんとよばさせていただきますね」

「もっとラフな感じでいいぞ？現に私達もトーレ姉と呼んでいるくらいだしな」

「わかりました、チンク姉さん」

「うむ、今まで私が一番下だったからな、姉と言う立場は新鮮だな」と言うことはまだ戦闘機人は五人だったという事だな

「取り合えず私を此処からだせ!!」

おお、忘れてた

ごめんごめん、今だしますからそんな怖い顔を俺に向けないで  
ほい、解除つと

急に立っていたトーレが枷が外れたように膝を付いた  
実際にあっただけだね、結界がね

「やっと解けた・・・さて、トレディチ、続きをするぞ」

「・・・え？終わったんじゃないんですか？」

「何を言ってる、これからだろ」

「マスター、私今日は稼動したばかりなので休みたいです」

「うーん、あまり負荷を掛けたくないから今日はもうやめよう」

「なら明日だ!!明日戦うぞ!!トレディチ!!」

何で戦う事限定なの？馬鹿なの？死ぬの？  
だから戦闘狂は大嫌いなんだよ

戦闘のことになると回り見れなくなるし強いし攻撃食らっても笑ってそうだし・・・もういやだわ

次戦うときは精神攻撃でもしてみえるかな？

頭の境界を操って見れば出来るかも・・・よし、試してみますかどうか  
どうせ負けたらもう一回！！みたいな事言ってくるからその度に実験させてもらいますか

自分で言うのもなんですが・・・ご愁傷様です（笑）

「わかりました。では明日、やりましょう」

「トレディチ、何を考えているんだい？」

「いえ、ちょっとした事なので気にしないで下さい」

明日からが楽しみだな

取り合えず、俺が考えれる範囲でどんな事が出来るか試してみますか

さて、どうしましょうか……（後書き）

隙間ってチートだよね？

後俺隙間の能力は知ってるけどどれが可能でどれが駄目なのかわからないんだよね……。誰か判る人居たらおしえてえ！！

俺の製作方法が・・・（前書き）

言うの忘れてた・・・

ギンガさん！！！！マジごめんなさい！！

この作品考えた後に気がつきました・・・あなたのナンバーが13  
だということに・・・

ま、まあ、13を名乗ってないからいいか・・・うん！！そうだ！  
！そうに決まっている！！

俺の製作方法が……

はい、こんにちはトレディチです

現在戦闘機人やってます

理由？死んだから

本来は死んだからって戦闘機人にはなれないんですよ

だって戦闘機人は純粹培養とクローン培養で作られるんだ

だから普通は出来ないはずなんだよ

でも、一応出来る理論はあったらしいですけど魔力が普通より高く適合率も良くないといけならしいですよ

で、偶々レリックの情報を掴んで例のバス襲撃事件が起きたんですが……偶々俺が生きていてさらにレリックが少し暴走、さらにどうしてか俺に同調し始めている

コレを知ったマスター（スカリエティ）が俺を連れてくるよう行った後、自分の理論が正しいのか実験した結果成功

そして俺が戦闘機人になりましたよって事です

それと、バスの中にレリックがあった理由は管理局がこれならバレナイと思ったからそうしたらしいよ

全く迷惑な話だ

そんな俺は現在調整中です

一応トーレ姉との戦闘で体が数箇所やられたので修復中です  
其処まで酷くはないのであと数分で直りますね

とは言っても2時間位ずっと此処に寝転がってるんですけどね

「ウィーニン」

「調子はどうだい？」

「良好ですよ、それで私はこの後何をしたらいいんでしょうか？」

「ん、本来ならトーレと戦う……のはずだったんだが、今は他の任務に行っててね。だから暫くはゆっくりしていくといいよ」

「そうですか……判りました」

折角じつけ……戦いが出来ると思ったのに……まあいいや

「それでは、そこらへんを探索しても宜しいでしょうか？」

「此処は君の家だからいいよ、後外にはあまり出ないでくれよ」

「判りました」

因みにさっきの修復中に俺の頭の中に知識を入れ込まれました  
そのとき一気に情報が入ってきたので痛みが着たけど流石戦闘機人  
直ぐに情報整理が追いついて痛みも無くなり全ての情報を把握でき  
ました

凄いわ戦闘機人コレはなっておいて良かったって言われるよ  
絶対に

まあそんな事はさておき、この家の配置を知りますか

一応何処に何があるのか気になるし知っておいて損は無いだらう  
で、此処は……食堂か？一般家庭にありそうなキッチンだな  
お？チンク姉だ

「チンク姉」

「ん？ああ、トレディチか、どうかしたのか？」

「マスターから御暇を貰いましたので色々この施設を見て回ろうか  
と思ひまして」

「なんかカロリーメイトみたいなもん食ってるぞ？」

「何それ？」

「マスター……ああ、ドクターの事が、お前はそう余分だった  
もんな」

「はい、それよりも今食べてるのはなんですか？」

「ん？ご飯だが」

「……」

「何だその目は」

「いえ、お菓子にしか見えなかったの。誰か料理はしないので？」

「あ……それなんだが……昔な、皆で料理を作ろうとした  
んだが……私とクアット姉とトーレ姉は駄目でウーノ姉は少し  
しか出来なくてドゥーエ姉は結構出来たんだ。だが、ドゥーエ姉は  
任務で居なくなってウーノ姉は知識が無かったので作る気が出なく  
断念したんだ」

「へえ、では変わりに私が作りましょうか？家庭的なスキルは持  
っていますので」

「本当か！！一度しか食べたことが無かったからもう一度食べてみたかったんだ！！」

「興奮しないで下さい、子供じゃないんですし」

「むっ、姉を子供扱いするな」

「その体系で言われましてもね」

「…………自分の方が胸や背が高いからって…………ブツブツツブツ…………」

うわああ、落ち込んだじゃったよ、やらかした…………

ん？男じゃないのかって？ああ、“前世”は男だったよでもこっちに来たときに女になった

一応口調は女らしく出来るけど心の中まではそうしないよ？じゃないと自分を保てないからね

因みに見た目は若くした八雲 紫見たいな感じだよ  
加齢臭はしないからね

「チンク姉、機嫌直して、好きな料理作ってあげるから」

「そんなんで誤魔化すつもりか…………」

「…………ふう、そんなにひねくれてたら料理は作りませんよ」

「…………卑怯だぞ！！」

「なら機嫌直してくださいね、妹からのお願いです」

「・・・・・・はあ、負けたよ、料理はトレディチに任せる」

「ってまあ、食材が此処にあれば作りますが」

「食材なら前に作ろうとした残りがある」

「いつのもですか？」

「ん？一ヶ月位かな？」

そんなもの使えるわけ無いだろ・・・・・・常識も無いのか・・・・・・チンク姉は脳も子供か・・・・

「なんか言ったか？」

「いいえ、何も・・・・・・では、手配お願いできますか？マスターに連絡お願いします。私はこの施設を見て回りたいので」

「わかった」

さて、ほかの場所に行きますか

次は・・・・・・てか、此処の施設には何があるかわからないから何があるかわからないしな・・・・

テキトウに歩き回りますかな

- - - - 移動中 - - - -

此処は・・・・・・お、カプセルがある・・・・・・誰か入ってる・・・・・・誰か

な？・・・あれ？この人メガー又じゃね？

ああ、そうか、もう捕まってるんだ

そういえば、ゼストはどうなってるんだろう？

それより他の戦闘機人は・・・まだだよね・・・あ、いるじゃん  
七人全員いるね

でも何で動いて・・・ああれリックがないからか

まだレリックは見つけていないみたいだな・・・

時系列的にもう見つけているはずなんだけど・・・

あ、私や他の転生者のせいで可笑しくなっているのか  
ならつじつまが合うな

それか単にまだなのか

よし、此処は妹として全力を尽くしてあげますかな？

私の能力さえあれば簡単に盗む事も出来るだろうし

恐らくだが神は俺や原作主人公達を同い年にしてると思う・・・調  
べれば一発なんだけど面倒くさいし

だから後5年は猶予があるはずだ  
ならその間に見つけてやんよ

レリックさんをね



俺の製作方法が・・・（後書き）

次の話出来てるけど投稿はまだしないww

数日後に投稿しますよ^^

隙間の中で（前書き）

今回は短いです

この話はそんなに書くことがなかったんでww

次話は長くする予定なのでよろしくお願いします

## 隙間の中で

「トレディチ、君に頼みたい事があるんだ」

「なんででしょうか？」

ども、トレディチです

最近は料理しかしてません

自分が戦闘機人っていう自覚が一時期ありませんでした

今はどちらかって言うと専業主婦的な感じがすごいです

毎日仕事が無かったので朝昼晩全て料理作ってました

それと、ウーノ姉が料理に興味があるらしく最近は所々教えながら料理したりもしています。

ウーノ姉は元がいいのか直ぐ料理を覚えてくれるし楽だわ

その反面にクアット姉が糞酷い……何あれ？ちよつと目を離したら色に変色していたんですけど……なんかコーンポタージュ作ってたはずなのに紫色になってたり真っ赤になってたり……もう二度と料理するなって言っちゃったよ

姉なのにその時だけ関係無く口答えしてしまったよ

流石にあれは姉とか関係なく起これるレベルだわ

そんな事よりマスターの話を聞かないと

「レリックの場所がわかったんだ、君のISで如何にかして持ってきて欲しいんだ」

「わかりました、で、その場所とは？」

「今は管理12世界に保管してあるがそのうちミッドチルダに来るが・・・君の能力を把握しておきたい。出来れば管理12世界で取ってきてくれないか？」

「無茶な事言いますね・・・まあいいよ。私も完璧にこの能力を把握していないので限界を知っておきたいのでやれるならやりますよ」

「ありがとう、何かあったら直ぐに連絡するんだよ」

「わかりました、では行ってきます」

後ろに隙間を作り倒れる様に入っていった

「……久しぶりに見たけどやはり気持ち悪いねあの能力」

「そうですね……」

スカリエッティの言葉にウーノ、トーレ、クアットロ、チンクは賛成した

でも本人は逆に心地いい感じがしてきている

[illegible]

さて、隙間に入ったけど行けるのかな？ 他世界にいけるとはあまり思えないんだけど……

この能力はどうやって好きな所にいけるのだろう……

テキトウに歩いていたら着くかな？

- - - - 1時間後 - - - -

歩いたけど・・・此処何処？外でも見て確認してみますか

・・・あれ？トーレ姉とかいないか？先に行ってた・・・訳ではない・・・よね・・・  
てか、よく見たら此処研究所じゃん・・・

使えねえなおい・・・

でも八雲 紫は自由にいろんな場所を行き来してたしね、どうなん  
だろ？

絶対にいけると思ったんだけどな  
俺には未だ早いつて事か？

オイオイ、いいじゃんかよ

まあ、八雲 紫の記憶や経験があれば使いこなす事は出来るんだろ  
うが私には経験も無く知識も無ければ八雲 紫の記憶も無い  
このうちのどれかがあればそれなりに使いこなす事も出来るのだろ  
うが俺には無い

そうなると今から経験を作るしかない

八雲 紫は何百年もの間で手に入れた力だからアレほどの力は手に入  
れれないがそれなりは手に入れる可能性が高い

・・・そうだ、境界を弄ろう

“時間”の境界と俺の“寿命”の境界を弄ろう

この“境界” 自体を弄ろう

そうすれば本来なら一秒なのに俺はその間に何年もの時間を体感することが出来る

可能なはずだ、まだ俺の考えでしかないけど

なら、やりますか・・・・・・オラ！！

・・・つぶはぁ、一気に力を使った

脱力感がやばいけど・・・成功したのか？

さつきみたく失敗なんて嫌だぜ？

さ、て、外見てみますか

・・・おお、止まってる！！

これはいいんじゃないか？いけるんじゃないか！？てか、隙間すげえ！！

もしかしてだけど、俺の推測でしかないけど神の奴、隙間の能力をそれなりに出来る風にくれたんじゃないのか？

あいつは賭けがどうたらとか言ってたから多分勝ちたい為になんかしただろうな・・・

でも、そうなら他の転生者にも他の神が何かやってるかも知れないよな・・・

まあ、今はそれは置いて置こう

考える時間は幾らでもある

今は世界自体を止めているからな

さて、やりますか



## 隙間の中で（後書き）

うん、実際隙間ってどんなのかわかんないから想像でしか書いていません

実際に解る人が居れば教えてください！！マジデ！！

これからご都合主義的なことが多々あるかもしれませんが・・・  
よろしく願います

この能力酷いはぁ・・・強すぎ(前書き)

こんにちは^^

最近ISのほうにネタ切れになってきてどうしようか迷っています

^^;

どうしようかなぁ・・・こっちで書いてもしょうがないんだけど

ww

## この能力酷いはぁ・・・強すぎ

こんにちは、 트레이ディチです

あれから50年位たったんですよ。そして、ミスったんですよ・・・

・最初の何年間か・・・

いやぁ、数年経っても体とか年取らないと勝手に解釈してたんですが・・・違いましたね・・・

体・・・成長しちゃったんですよ・・・あの時はまだ14歳の体だったんですけど・・・修行している最中に体の成長に気が付いて急いで体の境界を弄ったんだけど解き既に遅し・・・って感じだったぜ・・・

今は大体八雲 紫と同じくらいの背丈だと思う、実際には見たこと無いけど背がそのくらい伸びたってこと

はぁ、こんな姿でマスター達に遭っても大丈夫だろうか？

正直色々と体弄くられそう・・・まぁ、マスターだし良いか

それより、もう十分だろう、正直10年位修行した所でもういいかな？とか思ってたんですけど昔二次創作とか見た時他の主人公は100年単位でしてたりするから俺もやろう！！とか思ってたんだけどまぁ、50年で断念しました

やってる最中に気が付いたんだよね、自分の可能性を

だから中断したんだよ

それで今から管理12世界に行つて任務を遂行したいと考えてる

丁度いま時間止めてるしその最中に取ってきてさっさと終わらせて帰るかな？とか考えてる

そうだ、前にただ隙間の中を歩いて結局目的地に着く所が同じ場所でしかなかったという事があったけど、アレは行きたいところを頭で浮かべながら行かないと行けないと言う事がわかったぜ

言った事無いところでも名前さえ判ればいけるって言うしね

50年もだてに修行してないぜ  
大体の事は理解したぜ

さて、管理12世界に行きますか

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

簡単に着きましたね、昔は確か1時間無駄に歩いたんだっけ？  
馬鹿だったな、私。まあ私もあの時はかなり青かったからね、しょうがないよ、うん。

てか、何処にあるんだろう？レリックってどうやって発見すればいいんだろう・・・

隙間使えば一発か、駄目だな、隙間はチートだ

これはゲームで使ったら即効でクリアしてしまう程のセコサを持っている・・・

俗にいうクソゲー

でも、マスターの為だし早めにトーレ姉達の所に行きたいからさっさと終わらせますか・・・

えと・・・あつたあつた・・・結界張ってるけど、俺にとってはこんなもの無いも同然

境界を弄って・・・はい終了

後は持って帰って終了だ

もう少しスリルあっても良かったんだけどね  
でも、コレ任務なのよ、現実って残酷だねえ

さて、帰りますか



「一応結界などは解いていますので普通に開ける事が出来ると思いますので」

「君はかなり優秀だね」

「私が優秀なのではなく私の能力が・・・ですよ」

そう言っただけ俺は後ろを向き歩き始めた  
別にうしろめたい事がある訳ではない  
ただ、もう話すことが無いので歩き始めただけ  
決して何故へましてこんな成長した姿になったのか問いただされるのが嫌だからという理由ではない、絶対に

まあ、そんな事は放っておいてさっさと懐かしき部屋に戻りますかな？ってチンク姉じゃんか、あんまり会いたくないんだけどなあ・・・  
しょうがない、一応挨拶しておきますか

「こんにちは、チンク姉」

「！？お、お前、トレディチか！？」

「はい、すみません、色々ミスをしてしまい身長が高くなってしまいました」

「ミスで大きくなるのか！？」

・・・この人違う所で食いついてるよ・・・まあ、コンプレックスを持っているんだろうけど・・・目が可哀しいぞ、チンク姉

「まあ、私の場合は普通のミスでは無かったのだ」

「どんなミスをすればいいんだ!!」

「・・・私自身のISの能力の管理ミスです」

「じゃあそれを私にやってくれないか!!」

「危険なので駄目です」

それに小さいからチンク姉なのだ、小さくなければチンク姉じゃない  
小さくないチンク姉なんてチンク姉じゃない

「・・・無理なのか？」

「無理です、私だつてなりたくなつたのではないのですから」

「・・・そうか・・・」

肩を落としながら後ろを向いて何処かに去っていった

身長、上げたかったんだろぅな・・・多分なんか虐められたりした  
んじゃないかな？身長関連の事で

クア姉に・・・だと思うが

あの人は性格悪いしね

まあ今は放っておこう

面倒くさいしね  
↑

さて、寝ますか

言い忘れてましたが寝てないんですよ、俺

二日位

戦闘機人だから寝ないで数日戦闘する事は可能なんです、出来るだけ寝たいんですよ  
だから寝ますわ

お休みなさい

side Scaglietti

・・・トレディチ、私の新しい理論に基づいて作ったナンバーズ  
偶々頭の中に思い浮かんで欲望に忠実に造りだしてしまっただが・・・  
・予想外の強さだな  
それに自分の能力を制御できていないのか？あの力を失敗して身長  
が成長してしまったのか？  
判らない・・・詳しくはわからないが調べてみる価値はあるだろう  
それにトレディチがどのようなことまで出来るか私自身も知ってお  
きたいからな

取り合えずトレディチ以外を呼ぼう

トレディチについて話し合いをしないとな

『みんな、来てくれないか？トレディチについて話したいことがある』

『『『『『了解』』』』』

さて、早めに来て欲しいのだが・・・まあ時間はたつぷりある  
そうだ、レリックのナンバーは・・・6かじゃああの素体を使うかな  
あ、忘れてた、ドゥーエはトレディチの事知らないのか・・・今度  
報告着たら教えてあげないとな  
ドゥーエは妹が出来たら毎回はしゃぐからあまり教えたくはないの  
だが一応言わないと返ってきたときの反応がやばい（危ない的な意  
味で

「ドクター、何のようですか？」

トーレの声がしたため後ろを振り向いたら他の戦闘機人のウーノ、  
クアットロ、チンクも一緒にいた  
だが、チンクだけは何故か落ち込んでいた、何故だろうか、同情し  
たくなる感じがする

まあ置いておこう

「みんな一気に来てくれて嬉しいよ、実はなんだがコレを見てくれ」  
二時間前のトレディチの画像をみせた（トレディチにとっては5  
0年前）

「トレディチがどうしたんですか？」

「此处数分以内に彼女を見た者はいるかい？」

「私は見ました、身長が・・・」

ああ、だからか、あんなに落ち込んでいたのわ、妹の身長が急に大  
きくなって負けた気でもしたんだろう

「どういことですか？」

「いい質問だ、ウーノ。さっき 트레이チにレリックを取りに行かせただろう？その間に身長が、いや、年齢が変わっていたのだよ。本人は自分の能力のミスをしたといていたが、ね」

「ISのせいでも……ですか？俄かに信じがたいのですが……」

「本人は空間や次元や時間など物体ではないものでも操れると言っていたよ」

「……っ！！??」「」「」

全員スカリエッティの言葉に驚いた  
それもそうだろう、次元や空間、ましてや時間も操れるなどそんな能力があるなんて誰もおもわないだろう

「それと、さっきの 트레이チだ」

いつそんなもの取っていたんだという疑問は誰も持たずにディスプレイに注目した

そこには大きくなった 트레이チがいた

全員驚く、というより啞然としていた  
さっきは

かわいらしいが当てはまったが次に見せられた画像には妖艶というのが合っている 트레이チが出てきたのだ  
流石にこれには啞然するだろう、誰でもそうだが、急に二時間後の姿が変わっているのだからな

「ドクター、これからトレディチのところに行こうと思うのですが・  
・・どうでしょうか？」

ふむ、それもいいだろう

「いいだろう、なら全員で行こうか」

「わ  
「わ  
「わ  
「わ  
「わかりました」  
「  
「  
「

[illegible]

Side tredici

よくわからない

だが、  
いえる事がある

それは何故か悪寒がするからだ

よくわからないが絶対になにかまずいことがあるそうなんだ

今まで寝ていたのにすぐ起きた

まだ数十分しか寝てないのに起きたのだ、絶対になにかある・・・。  
おし一旦旅にドクトレディチ、私だ入ってもいいか？」おいおい、  
タイミングよすぎんだろ、見計らってた？ねえ見計らってたの？  
はあ、しゃーない、出ますか

「なんでしょうかマスター」

扉を開けたらあら不思議、他のナンバーズの方々が皆さんいます（4人しかいないけど）

何しに来たの？

「いや、此処にいる皆トレイチの事が気になってね。何単純なことで、君の能力や色々聞きたい事があってね」

まあ予想の範囲内だったね、聞かれると思ってはいたよ

「例えば・・・どんなことですか？」

「まず、どうしてそうなったのか聞きたいな」

俺以外の人全員がうなずく・・・そうだった？ああ、体のことが

「えと、先ほどマスターに言った空間や次元や時間など物体ではないものでも操れると言いましたよね？アレがヒントです」

「むっ？意味が解らないのだが・・・もう少しヒントをくれないか？」

「では、時間がヒントです」

「・・・自分の時間、体の時を進めてしまった・・・ということか？」

「惜しいです。答えはこの次元すべての時間を止めていたのですが・・・間違えて自分の時間を止めるのを忘れていて数年たった日にそ

れに気がつき急いで止めたが意味がなく既に成長していた、が正解です」

「解るわけないじゃない!!」

クアット姉が叫ぶ、まあ解つたら可笑しいと思う

「……今の話ならトレディチが自分の体の時を止めることが出来るなら自分の体の流れの時を戻すことが出来たんじゃないか？」

「…….……あ……よく考えたら出来るかも……」

「本当にまだ把握出来ないみたいだね……でも私にもトレディチの事で少しわかったことがある」

「何ですか？」

「君の能力は恐ろしく強い、次元をも操れる時点で君にかなうものは少ないだろうね」

「でしょうね、あと気になっていたんですが私の固有武装って何ですか？」

「ああ、いつていなかったね。君の固有武装は弾幕結界、個々は弱いが異常な数のスフィア型シューターを放つ事が出来る武装だ」

これまた東方関連か……神の奴がなんかしてるな……こんな事しなくていいのに、むしろ違う武装で楽しめたかった

「そうですか……わかりました。今度試してみます」

「わかった、んじゃ僕の用事は終わったから帰らせてもらうよ、皆も帰るよ」

全員頷いた

「了解ですマスター」

さて、寝ますか、皆さんまた今度

って終わらせたかったのに……なんでまだいんだよこのロリ  
コンの奴らに度ストリートな容姿の女の子A チンク  
お前このやろう!!俺の睡眠を邪魔するのか!!一文字伏せるだけ

でひょになる分際で！！チン。！！

つと、俺は何をしていたんだろう・・・姉にこんな事思ってはいけないだろう・・・落ち着こう・・・

「どうしたんですか？皆帰りましたよ」

「お願いがある」

おお、大体予想つくわ、てかさつきやり取りしただろ、これ

まじ何なのよ、帰ってくださいよ

「姉として妹にお願いをするのは少し抵抗があるのだがな・・・どうs「いやですよ」まだ全部言っていないのに断るのか！！姉の願いを断るのか！！」

「どうせ、身長を高くしたい、とかでしょ？嫌です」

「いいじゃないか！！減るもんじゃないし！！」

「いいえ、ファンが減ります」

「ファン？私は有名になった覚えはない」

「テレビの前の皆さんや今この小説をみている人はあなたが大きくなったら引きます」

「どうした！？意味わからないことをいうな！！」

「すみません、電波が」

イカンイカン、危ない電波が・・・途中から可笑しくなってしまう・・・

「それにどうするんですか？」

「な、何がだ・・・」

「もし、もし私が能力をつかって時を進めたのにチンク姉の体がそのままだったら」

「うつ！！・・・そんなのはその時だ！！」

「いいんですね、もしそうだったら一生絶望しながらすごす事になりますよ？そして永遠とクアット姉に弄られ続ける日々を耐える事になっても」

「う・・・うわああああああああああん！！！！！！」

「あ、走って行っちゃった・・・まあいいか」

絶対に大きくしないほうがいいしね

ではまた今度

- - - - - 其の後のチン。姉 - - - - -

伏字止めるよ〜

グズツ・・・絶対に大きくなるんだ・・・大きくなって皆を見返してやるんだ・・・

私は・・・私は・・・絶対に大きくなってみせるんだあ・・・

この能力酷いはぁ・・・強すぎ（後書き）

チンク姉に関してはただやりたかっただけです  
後悔はしていませんwww

さて！！今回も盗りに行きますよ！！（前書き）

こんにちは

皆さんに言いたい事があります

ごめんなさい！！こっちの更新忘れていましたので今日一日授業中とかも掛けて小説かきましたw

25日に夏休み入りますんで夏休みに入ったらこっちメインで書いていこうと思います

決してもう一個書いてる小説が詰まったなんて訳じゃないです  
ネタが無くなった訳でもありません・・・・・・

さて！！今回も盗りに行きますよ！！

こんにちは、トレディチです。今年で何と14歳になりましたん？前と年が違う？それは時が経ったからに決まってるじゃないですか

その間レリックやそれに変わりそんな魔力結晶体をひたすら集めていただけですし・・・あ、因みに身長はずっと同じ状態で止めています

なので見た目は完璧に紫さんです

一応身長等はいえゆるんですが・・・体力使うんですよ、だからあまりやりたくないんです

この体に妖力があれば話は別だと思っんですが・・・まあ私はあくまで私は戦闘機人サイボーグなので妖力なんて欠片ほども持っていないんですかね

欲しいなあ・・・妖力・・・あ、そうだ

話変わるんですが9〜14歳の間で変わって話さなければならぬ事が一つありました

それはですね、一回トーレ姉達の前で男口調で喋って話してしまいましてそのせいで数日間の間説教と完璧に女口調にする為の調教？が行われてしまい結局男口調が話せなくなり女口調でしか話せなくなりまして・・・全く・・・

心の中だけは！！男でいたいと思っていたのに・・・

まあ落ち込んでも仕方ありませんですよ、現実に向き合おうと思っっています

それで今マスターに呼ばれたのでマスターの部屋に行く予定ですまあどうせいつも通りレリックか魔力結晶体を集めてくるのどちらかでしょうね

まあいつも通りにやれば私的に数時間、マスター的には数秒か数分ですしね

さて、行きますか

- - - 移動中 - - - -

「マスターまた物盗って来るんですか？レリックと魔力結晶体どちらですか？」

「来たね、今回はあるロストロギアを盗って来て欲しいんだ」

「ロストロギアを・・・ですか？」

また珍しい

「ああ、私が欲しいロストロギアは変わっていてね、召還系のロストロギアなんだ」

「ロスト・・・ロギア・・・ですか」

「ああ、行ってきたくないかい？」

「マスターの頼みです、行きます」

「ありがとう、行って欲しい場所は第18管理世界だ」

「わかりました、行ってきます」

後ろの隙間を展開しマスターに背を向けた

「行つてらっしゃい」

その言葉を聞いた瞬間フツと笑みが零れた

- - - - - またまた移動中 - - - - -

さて・・・此処か・・・

隙間出てきてから周りを見渡した・・・が、木、木、木、木、木

そう、森だ、周りは木ばっかだ

そんな周りの中に一つだけ場違いな物があつた

二件分位の家がぼつんと建っていた

研究所らしくないし研究所にしては小さい

でも何件も研究所を見ていた私にとってカモフラージュでしかなかった

大抵こういう手の研究所は地下に広い施設が作られていて其処では大抵大量の物か者が研究されている

物の場合暴走か使い物にならなくなるのどちらか

者の場合は精神が壊れる、死ぬ、見るも無残な姿に変わっている等様々

私はその殆どを見てきた

決して慣れるようなものではなく慣れたくも無いものであつた

だから私は割り切つた

そうでもないといこの世界は生きていけないし生きていく資格さえも無いと私は断言したからだ

「さて、やりますか」

隙間で時の境界を弄りこの前次元の時を止めた

さて・・・どこにあるかな？目的のロストロギアは

そういえば召還系って聞いてたけど・・・どんなのなんだろう？  
形聞くの忘れてた

・・・これじゃ今まで見たいに見た目とかで探せないじゃん・・・  
どうしよう？

まあ悩んでもしょうがないか

－ － － 研究所内探索中 － － －

・・・それっぽい物が無い！！

てか此処広すぎ！！しかも部屋がいくつもあって面倒臭いし！！

もう・・・嫌だ・・・

下手したらもう合ったけど違うと思ってスルーしちゃったとかない  
よね？あつたら泣く

絶対に

この階は此処が最後か・・・いかにもって感じだね

さて入りますか・・・あ、鍵必要なのか・・・でも鍵持ってないし・

・・・まあ隙間あるから関係ないんだけどね

そおいつと

解除完了

さて、中には何が入ってるかな？目的の品があればいいんだけど・  
・お？研究員が二人いる・・まあ私にはどうでもいいや  
さっさと探そう

此処でも無かったか・・・嗚呼、いつたい何処にあるんだろう？  
また探さなきゃいけない・・・orz

ん？あれ？研究員の野郎共なんか持つてね？

・・・あれロストログアだったりしない？

わかんないな・・・どうしよう・・無理やり奪いたいけど今時  
止めてるから人が物持ってたりとか何かに挟まっていたりしたら取  
れないんだよね

だから時止めてるといいように見えて少し不便な所もある  
時止めたら人なんて傷すら付けること出来ないし

しょうがない一旦隙間の中入って時を動かすかな

そおい

——この九尾のロストロギアどうやって実験するんですか？——

——ああ、それは一回召喚しなきゃいけないんだが……その方法がわからないんだよな——

——ええ！！じゃあどうするんですか？——

——無理矢理召喚する。下手したら暴走するかもしれないがな——

——暴走とか絶対嫌ですよ！！まだ死にたくありませんから！！——

——俺も嫌だよ、さあ、そいつに高エネルギーの魔力を当てて召喚しちまうぞ。其処に置いて離れておけ——

——あ、はい——

——お？置いてちゃうの？置いてちゃったら……私が盗っちゃうよ？——

ロストロギアを置いた研究員の背後に隙間を展開して固有武装の弾幕結界を打ち込んだ  
最小限で

なのであまり音は立てずに研究員Bの気を失わせた  
その光景を啞然として見ていた研究員Aは啞然とした後直ぐに後ろに逃げて何かのボタンを押しに行った  
恐らく警報装置の類の物だろう

そんなも押しに行ったら解るに決まってるでしょう  
それを見ちゃったら……止めたくなくなっちゃうじゃないか！！

研究員Aはボタンを押したなのに装置が働かない

理由がわからず整備不良の類かと考えながらも何回もボタンを押す  
そんな研究員をみてトレディチは笑った

何故なら警報装置が働かない理由は彼女にあったからだ

彼女が意地悪をしたのだ

境界を弄って回路を打っ壊したのだ

なので笑っていたのだ

「ねえ、その研究員さん」

研究員Aはビクツツとして振り向いた

「な、なんででしょう？」

「このロストロギアについて聞きたいのですが・・・宜しいでしょうか？」

「私達にもよくわからなくてですね」

「嘘はいけませんよ、このロストロギアを解除する方法を知っているのはさっき話を聞いていましたのでわかります」

「え、あ、えと、その・・・」

「言わなきゃ・・・解りますよね」

「は、ハイハイハイ！そ、そのロストロギア、“九尾”はある一定の魔力が高魔力のどちらかが召喚を解く鍵だそうです！」

「だそう？どういうこと？」

「えと、このロストログア“九尾”はつい最近発見されていて封印場所にその様に書いてあったので・・・われわれはそれしか解りません」

「・・・あ、こいつから聞かなくてもこいつの記憶の境界弄って調べれば速攻で終わったじゃん、ミスッた・・・今から調べよう」と

うん、今は本当みたいだしこれ以上知らないみたいだね  
なら

「情報ありがとう、んじゃ眠っててね」

弾幕スタート^^

「グハッ!!」

そして研究員は気を失いましたよっ

さて、さっさとロストログアを盗って帰ってご飯でも作りますか

今日は何にしようかな？ハンバーグにでもしようかな？

そんな事を思いながらロストログアに手を伸ばしたらなんと

急激に物凄い量の光が溢れんばかりに輝き始めた!!

おいおい!!まじですかい!!

流石にこの光には驚いて目を閉じてしまった

光が止み目を開けた

「召喚ありがとうございます、此れよりあなたをマスターとして認めます」

へッ？何で藍が？何で八雲藍が此処にいるの？  
まじで・・・



さて！！今回も盗りに行きますよ！！（後書き）

藍様は俺が一番好きな東方キャラです！！本当は藍様を主人公でだそうかな？とか思ってたんですが他の有名なのは二次小説と被ってしまうので止めましたw

別に被ってもいいじゃんとか思うかも知れませんが！！私はあるまじり被りたくなかったですし、被ったら比較されて萎えちゃいそうなので止めたっていうのが本心です

藍様・・・なのか？いや、違うな（前書き）

最近風邪もあつて寝込んでいましたw

今日即席で書いたんで駄文かもしれませんが宜しく願いします

藍様・・・なのか？いや、違うな

どうも、トレディチです

私今凄く困っています。

理由？それはマスターの命令でロストロギアを盗みに来てそのロストロギアに近づいたら何故か光始めてその光が止んだ瞬間に目の前に私を主と呼ぶ東方キャラにそっくりな狐耳の女の子が現れたからですよ

予想外にもほどがあります

それに私的にはNARUTOの九尾的なのを想像してしまいましたのですが・・・何故だろう？

取り合えず色々話して聞いてみますか  
何か役立ちそうな事もあるでしょうし

「ねえ」

「何でしょうか？」

「貴方は・・・何者？」

「私ですか？私は魔術師によつて魔力の湖と言われる現象を使い構成され造られた存在です」

魔術師？魔導師では無く？この世界は魔術師も存在するのか？

「魔術師って？」

「魔術師とは神秘を起こす者です。今はその素質を持っていても物に頼り使うことの出来ない者が殆どです」

一応この世界には魔術が存在していた・・・しかしデバイスを造ったことによつて全員それを使つてしまひ魔術を使える素質を持つてゐる者もデバイスを使い魔導の方へ移り現在では魔術を使えるものがいなくなつたと言う事が

「わかつたわ、取り合えずこの場所を変えましょう」

#### 隙間展開

「この中に入つて」

「こゝ、この中ですか？・・・マスターの命令だ・・・仕方ない」

「何か言つた？」

「いえ！！何も」

「じゃあ行くわよ」

先行してトレディチが中に入り九尾もそれに付いて行く形で入つていった

やっぱり此処は心地いいわね

この子は・・・顔色が悪いわね、最初は皆この空間を受け付けない

からしょうがないのよね  
慣れたらかなり心地いいのに

「聞きたいことがあるのだけど・・・いいかしら？」

「はい、かまいません」

「じゃあ、どんな目的で作られたの？」

「私は魔術師の補助、もしくは戦闘でのタゲ取りの様な事を目的として作られました。攻撃も得意ですが補助や防御、結界等も得意です。」

「オールマイティなのか・・・それにタゲ取りも出来るという事はそれなりの強さがあると言う事だと思う  
凄いな

「魔術は使えたりするの？」

「使えますが其処まで凄い事は出来ません。どちらかと言えば後衛の仕事を中心にやっていましたので其方の魔術の方が得意です」

まあその辺はまた今度にしましょうか

「今からある場所に行くの、私のマスターがいるところに」

「マスターのマスターですか・・・」

「ええ、元々私は貴方をマスターの元に届けるのが仕事なの。だから私は貴方を届けなければいけない・・・ダメかしら？」

「それがマスターの頼みなら・・・」

「凄いなこの子・・・まだ知り合つて数分、一時間も経っていないのに何故私の頼みならと言えるのだろうか・・・私を試している？いや、試されていても別にそんなのはいい、何故なら私は届けばいいだけ」

「その後の事は特に気にする必要は無い  
死んだ所で私自身に支障は無いのだから」

隙間を開きマスターの前に現れた

「マスター、例のもの（者？）をお持ちしました」

「お？帰ってきたか、随分遅かったね」

「色々ありまして」

「取り合えず・・・この子が、ロストロギアなのかい？」

「はい、召喚型ロストロギア、『九尾』です。何故か私に反応してしまい召喚されてしまいました、すみません」

「まあ召喚の手間が掛からなくていいから別に誤る必要は無いよ」

「ありがとうございます」

「んじゃ調べさせてもらいますか」

「了解です」

その場から離れようと出口へ歩いていった  
行こうとしたら何かに掴まれた

今自分のいる場所は引つかかるようなものは無い筈・・・何に引つかかった？

後ろを振り返った

其処には私の服を引っ張っている狐耳の子が居た

怖いのか？今まで困難に立ち向かってきたと思うのだが・・・

「大丈夫だよ、マスターは君を調べるだけ、殺す事も無いと思うし傷つける事もあまりしないと思うから」

「本当ですか？」

「多分ね、それはマスター次第ですけど」

ちょっとマスターのほうを見ていた

其処には汗を掻いたマスターが居た

アレは恐らく解剖する気満々だったんだろうな・・・まあそれでもかまわないんだけど、汗だらだら掻いてるって事は・・・多分私が何言ってもマイナス思考に行くな・・・やらかしたな私

藍様・・・なのか？いや、違うな（後書き）

この先どうしようかなあ？vivid編もやるかやらないかでこの  
先だいが変わるんだよね・・・でも其処まで続けれるか心配だわ  
ww

・・・なんだ、予想と違う方だったのか（前書き）

今回はかなり短いです

一時間もかけて書いてないのでw w

東方のキャラ何人が採用しようと思ってるんですが・・・誰採用しようかな？

取り合えず橙は入りたいと願望を言ってみます

・・・なんだ、予想と違う方だったのか

さて・・・九尾と分かれてから数時間、どうなったんだろうか？  
生きていれば今後色々手伝わってもらうが死んでいればそれはそれでも良い

所詮隙間を使って時間を止めた中で動けるのは私だけ  
だから時間が止まっていけないときのみ

生物の駆除等のマスターからの命令がきたら手伝わってもらう  
それ以外だと・・・何を手伝わってもらう？

うーん・・・あー！そういえば東方だと確か藍って家事して  
なかったっけ？

なら見た目生き写しのような九尾なら同じ事できんじゃないか？

まあそれは後で生きていたら聞こうかな？

取り合えずマスターのところに行って生死を確認しようかな

隙間は使わないで行こう

偶にはそれもいいと思う、少しぐらいは歩かないとね

隙間は楽すぎる、だからもしも私のこの能力を封印されたら隙間に  
頼りきりの私は戦えない

一応弾幕結界という固有武装はあるが全然使用した事が無い  
というか使用する場面が少ない

使用するとしたら適当な力で相手を気絶させる為に打つ程度  
東方の原作に出てくる八雲紫みたいな弾幕は愚か、チルノの弾幕す  
ら出来ない

今の私は妖精等の雑魚より少しすごい弾幕を撃てる程度だ  
そろそろ弾幕結界について練習してみようかな・・・  
しますか、また今度

こんな話をしていたらいつの間にかマスターの部屋の前に

「コン、コン」

「マスター、入ってもよろしいでしょうか？」

「ん？ああ、トレディチか。いつもISを使って入ってくるからわざわざドアを叩いてくるとは思わなかったよ」

「まあいつもそうですからね、あの九尾は？」

「あの子かい？あの子なら生きてるよ」

「生きてるんですか……」

「何故残念そうなんですかマスター」

ん？あ、藍じゃなくて九尾じゃん、別に残念そうなんじゃないよ  
ただどちらかと言えば死ぬ方に賭けていたから失敗した感がハンパないだけだよ

「まあ其処は置いておいて「何故置いておくんですか」……貴方はこの後どうするの？」

「無視ですか……もういいや、私はこの後貴方についていきます、前マスターには封印を解いたものの言う事に従えとの命令でしたから」

「そうなの？なら此処の家事をお願いするわ」

「・・・・へっ？」

「私此処で料理作る担当なんだけど、最近仕事が多くてちょっと作る気が起きないの。だからお願いね」

「わ、私料理とか作ったこと無いんですけど!!」

「え？まじ？」

「はい」

此れは予想外

原作と同じスペックでも持つてるのかな？とか思ったけど違ったみたいだ

やはり藍ではないのか

「そう・・・なら今はいいわ、いずれ料理出来るようにしておいてね」

「あ、はい、解りました」

「今はやる事ないから私の部屋に行きましょう」

「わ、解りました」

さて、今後何をしてくれるのか楽しみだ

後、料理はウーノ姉と一緒に教えるとするかな

二人とも出来るようになるれば私が料理しなくてもいいだろうしね

「マスター。この後何か仕事ありますか？」

「いや、他の仕事はトーレとチンクが行ってるからないよ」

流石姉達、妹に負けまいと頑張って仕事している

流石に自分がやるべき仕事を妹に取られて仕事が無くなるなんて戦闘機人としては嫌なんだろうな

それが単に妹とになにか負けるのが嫌なだけなのか

「じゃあ私休んでますね、行くわよ」

「あ、はい」

さて、何をしようか・・・あ、そうだ、この子の実力測る為にトーレ姉と戦わせるかな？トーレ姉も喜ぶだろうし実力もわかるしこの子には可愛そうだけど・・・まあ世の中残酷って事で我慢してもらおう

お？顔色が悪く・・・何かを感じずいて寒気が走ったな？でもそれが何かわからない・・・って感じだね

判った時に後悔すると思うけど、頑張ってね？直接言わないのは愛の鞭だと思ってね

・・・なんだ、予想と違う方だったのか（後書き）

次の話は長くかけると思いますがもう一つの小説書く予定なので遅れるかも知です

其処の所は了承お願いします

思い立ったが吉日・・・ではなかったのか・・・（前書き）

遅れてすみませんでした

思い立ったが吉日……ではなかったのか……

こんにちは、トレディチです

現在マスターにお願いされてレリック確保に来ています  
そのレリックは何処かの貨物列車の中にあると聞いて探そうと思  
ったんですが、明らかに一つの列車に集中して魔導師が乗ってるの  
見ちゃいまして即効でレリックのある貨物列車に乗り込んで少し動  
いてから中にいる魔導師全員を隙間で弄くって気絶させて中を搜索  
中です

本来ならそんなことせず時間を止めて探すのだが、今回はあの九尾  
の子も参加するからあの子のやりやすいようにした

あと、あの子の名前勝手につけちゃいました

本当は可愛い名前にでもしようかな？なんて思ってたんだけど実際  
あんなに藍様に似てるとなると間違えて藍っていいそうなので名前  
は「藍」にしました

間違えてつけた名前と違う名前呼ばれるのは可哀想だと思うし、私  
的にも嫌なので間違えようの無いように「藍」にしました。

そのほうがいいと思うんだ、うん

——トレディチ様、レリックを見つけました——

——本当？なら直ぐにそっちに行くわ——

意外とあっさり見つけちゃったな、まあ早く終わるからいいか  
あ、因みに私の名前おしえたら何故かマスターから様付けになりま  
した

理由はどうでもよかったから聞いてません

まあこんな事はどうでもよくて、さっさと隙間を藍のところに繋げてっと

目の前に隙間を展開してその中に入り藍の元にいった

「藍、レリックあったって本当？」

「私はそうそう嘘は付きませんよ」

「そう、なら帰るわよ」

「解りました」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

さて、着いた着いた

「マスター、レリックもって来ましたよ」

「おや、今回は九尾の子を連れて行ったから時間がかかるのかと思っ  
っていたけどそんな事は無かったようだね」

「優秀ですね、この子。後この子の名前は藍ですのでそっちで呼んで  
あげてください」

「解ったよ」

さて、この後は藍とウーノに料理教えながら夕食作って・・・

「そうだ、 트레이ディチ。 少しいいかい？」

「ん？ 何でしょうか？」

「君に少し休暇を与えようと思ってね。 クライアントからは現在レリックは見つかってないらしく管理局もまだ目星もついてないらしくてね、 少しの間仕事が全く無いんだ」

「はい、 それで？」

「だから君にはその間、 まあ約一週間ぐらいかな？ 遊んでおくとい  
いよ」

「は、 はい、 解りました」

「解ったならもういいよ」

「では失礼しました」

休暇、 か・・・

考えてみれば今の今まで休んだ日は無かったような・・・  
レリックやロストログア搜索日以外は料理作ったり教えたり模擬戦に付き合っ  
てあげたりで忙しかったからまともに休んだ日が無いよ  
うな

ならいつその事今回貰った休みで何かしてみるか？

でも、 此処には娯楽なんてもの無いし、 今から発注しても来るころ

にはあんまり遊べなさそうだし  
ならどつかにでも行くか？

あ、それがいいかも。折角だし原作ツアーでもしてみるかな  
でもそれしてあんまり原作の主要メンバーと転生者には関わりたくないし

今関わって後で支障を出したくないしね

でも、私も転生者の端くれだし原作ツアーぐらいはしたい・・・

どうしよう・・・

よし！！行こう！！思ったが吉日だ！！なら早速行く前に藍に言う  
ておこうと

——藍、私ちょっと出かけてくるわ——

——急に何ですか！？というかどうかということですか！？——

——いや、マスターに休暇貰ったから出かけようかなと——

——はあ、わかりました。いつ頃帰るのです？——

——決めてないからその内って感じね、私がない間ウーノ姉と  
一緒に料理作っておいて——

——解りました、では行ってらっしゃいませ——

——行ってくるわ——

やっぱり持つべき者は優秀な部下だね

んじゃ早速原作の場所“鳴海”に行きますかね  
あ、その前に服どうにかしないと

こんな体にピッチリくっ付いてるスーツじゃ外に出歩いた時変に注目浴びちゃうしね

鳴海の服屋さんで適当に拝借してきますかな

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

という訳？で着ました！！鳴海イ！！

で早速服を適当に貰いに行きますか

現在隙間の中から全ての服屋を見えています

いい服あるかぁ・・・できれば八雲紫のがあればいいんだけど・・・  
まあ無いですよ

適当に可愛いのは拝借しますか

下着も貰って・・・う、これ小さい、もう一回り大きいんじゃない  
と無理そうね

最近徐々に大きくなってるのよね、胸

はあ、これ以上大きくならないでよ？お願いだから

毎回チンク姉に怖い目で見られるんだから

選んだのはジーパンと長袖のＴシャツとごく普通の格好

一々派手にする必要もないんで

「さて、鳴海に着たんだし色々探索しようかな」

少女探索中

あれだね、原作に出てきた海岸とか公園行ってみたけど特に感想は無い

っていうか普通！！

特に変わったものが無い！！期待して損した  
これじゃあ即効で帰っちゃいそうだな

あ、そうだ、みどり屋に行こう

本当は原作メンバーや転生者にあつて何かあつたら嫌だつたから行く気は無かつただけど他の場所が期待外れにも程があつたので期待が外れないと予想されるみどり屋に行くしかないのだ（キリツ

さて、  
行きますか

[illegible]

さて着きましたたみどり屋

今は空いてる時間なのかな？人が少ないな  
結構繁盛してるイメージがあったから込んでると思ったけどそうでもないのかな？

まあいいか、入って食べ物食べて帰ろうかな？

結局休暇貰ってもあまり意味が無いんだね

はあ、まあいいや

今はそんな事考えないでみどり屋で食べよう、うん

お金は銀行からくすねてきたからかなり持ってるし無くなっても財布に手をつ込むフリをして隙間を銀行に繋げてまたお金取ればいいしね

さて、入りますか

妖怪の賢者（偽） 御来店！！なんちゃって

「いらつしやいませ、席をご案内し・・・ま・・・」

ん？歯切れが悪いぞ？どうしたんだろ？ってあれ？何か見たことあるこの・・・子・・・

さとり！？東方に出てきた古明地さとりじゃん！？なんでこんなところに！！まさか！！

「八雲 紫・・・あなた転生者ね・・・」

バレタ！！いや誤魔化せば・・・

「無駄よ、私には心を読む程度の能力がある。あなたが私の、いえ、東方の原作の方の名前を心で思った時点で転生者と丸わかりよ」

ク！！やられた！！今からでも遅くない、一応転生者の神に与えられた力を消す能力を発動して置こう

「！？心が読めない！！」

「流石に対処させて貰ったわ」

さて、この子どうしようかしら、私の心を全て読まれたとしたら・  
・消すしかないわね  
それに転生者の神に与えられた力を消す能力で無効化出来たという  
ことはやはり転生者のようね

最悪だわ

思い立ったが吉日……ではなかったのか……（後書き）

はい、さとり出して見ました

自分でも本当は出す予定だったのはさとりではなく他のキャラだったのですが、なんとなくインスピでさとりが思い浮かんだのでさとりにしました

東方キャラは大量の人数は出す予定ありません  
おそらく後一人か二人だして終了の予定です

情報は大切、故に欲しい（前書き）

本当はもう投稿する気なかったんだけど続き気になるという感想を  
もらったから書くことにした

それにもう学校の授業はあつてないようなものだから書けるんだぜ  
だから少し投稿遅いかもしれないけど更新することに決めました

## 情報は大切、故に欲しい

「少し待ってて、この人たちを近づけさせないようにするから」

そういつてとことこ可愛らしく歩いて行く古明地 さとり (仮)

その間私は指定された奥のほうにある席に座り彼女が来るのを待つ正直私としてはマスターに迷惑を掛けたくないので早々に隙間を開いて帰りたい。だが、他の、私以外の転生者の事も気になる。

後々脅威になりうる可能性のある転生者の能力等を知っておけばかなりのアドヴァンテージを獲得することになる。

ただど何かあってマスターに迷惑掛けるのは嫌だ……どうしようかなあ……

そんなことを考えていたらさとり (仮) が此方に向かってきたそしてその後ろには物凄い形相をした高町父の姿が……

「……どうしたの？」

「いえ、あなたの後ろで物凄い形相をした人が此方を睨んでいたのがビックリしてて」

「へっ？……あ！？ちょっと何してるの！！こっちに干渉しないでって言ったでしょ！！」

私の言葉により後ろの存在に気が付きましたとことこ可愛らしく歩いて高町父の元へ行った

「はは、ごめん、気になっちゃって」

「最低だよ！！そういうの」

ガミガミ言いながらさとり（仮）は高町父を説教する  
子供にガミガミ説教される大人なんて見たくない  
私の予想でしかないけれどもこの説教結構続くと思うんだ。しょうがない、さつさとその説教終わらせてあげますか

- - - パン、パン - - -

自分の手を叩き二人を此方に向かせる

「御説教はこのくらいにして下さいませんか？そろそろ私は本題に入りたいので」

「あ、ごめん。でもこの人もう少し説教しないとまた話を聞こうとすると思うんだ」

チラチラ高町父の方を見ながら怒っているかのような顔をしている  
それに反して高町父は笑っている、決して苦笑い等ではなく心の底から笑っているような顔だ

自分の娘に説教されるのがうれしいおじさんって感じの顔だ  
正直嫌だね、こんなのが自分の父親だったら

「大丈夫よ、私には隙間があるから其処で話せば大丈夫よ」

「やっぱり・・・わかった、そうさせてもらおうよ」

今のヤツパリは恐らく私の能力が原作の八雲紫と同じ能力なのではないか？という推測を立てててそれがあたったから出てしまったんだろうな。

まあそんなのはどうせバレると思われるものだからどうでも言いや、  
兎に角他の転生者の情報を聞き出さなくも「ちよつといいかい？」

はあ、面倒くさいなあ・・・

「なんでしょうか？」

「もしも君があの子に何かするようなら、僕は君に容赦しないからね」

おお、こゝこゝ

「あら、じゃあ私殺されちゃうかもしれないのね」

笑顔で言いながら隙間の中に入った。よし、ある意味勝った  
隙間を閉じさとり（仮）のほうを見た  
なんか顔が青ざめているし

「あ、いや、隙間の中って予想以上に気持ち悪くて・・・」

「そう？意外と心地いいわよ？」

「そうは成りたくないわね」

何でだろ・・・普通にいいと思うんだけど

「そんなことより聞きたいことがある。何故突然あなたは海鳴に来たの？」

「一週間暇をもらったから原作に出てきた場所でも見て回ろうかな

「?って思ったの」

「意外と単純なんだね。じゃあ原作介入をする気なの?」

「正直したくないんだけど・・・私の立場的にしちゃうのかな?」

私はあくまで戦闘機人、マスターの命令次第ではなんでもするのが私だから

「・・・その立場については教えてくれないの?」

「言うと思う?」

「・・・・・・・・・・交換条件ではどう?」

「・・・どういうこと?場合によっては私はこの場であなたを殺すことになるわ」

「あなたの立場を把握して置きたい、場合によっては私の今後を左右するかも知れないから。その代わり転生者の姿の写真と能力や魔力等についてでどう?」

これは美味しい情報だがリスクもでかい  
だが情報は立場だけだ、結局後にはばれてしまう

それに私の能力に関しては聞かれていないしマスターの元で動いているという情報だけでそれだけのアドヴァンテージを手に入れられるのだ

願ってもいない情報だ

「今あなたが何処にいるのかわかってる?隙間の中よ、ここじゃ私

がルールみたいなもの。その中で交換条件を持ちかけるのはどうなの？」

「あなたには隙間の能力があり、恐らく他にも能力がある。それは私も同じであり、あなたは私の他の能力をまだ把握出来ていない。把握出来てないのに戦うのは少し厳しいかと思うけど？」

「……フフフ、そんなの私には全く関係ないんだけどね。いいわその交換条件に載ってあげる。」

「ありがとう、その前に自己紹介

名前は古明地 さとり

これでもなのは達と同じ年の14歳

能力は3つ、心を読む程度の能力と動物に愛される程度の能力と身体能力が全てMAX

魔力ランクはSランク相当

デバイスは持っていないから簡易的な魔法しか使えない、というよりも魔法自体あまり使う気が無かったが正解かな？

だから戦闘向けではないんだ  
ちなみによく間違えられるけど男だからね」

そか、戦闘は出来ないか……ん??最後なんて言ったの?コイツ

「男?今男って言った?」

「そうだよ、男だよ、悪かったな」

「まじで!!!リアル男の娘初めて見た」

「うっせ!!!気にしてるんだよ!!!結構」

「怒っても可愛い……流石男の娘」

「!?!?!?!?!?」

しかし神も凄いことしたな、東方のさとりさんと同じ名前と同じ容姿なのに性別だけ違うとかまじやることがえげつないな

「まあ可愛いのは正義よ。次は私が紹介するわね。」

名前はトレディチ

年はあなたと同じよ

能力は境界を操る程度能力、他は言う気はないわ

魔力は測ったこと無いわ、まあ境界をいじればそれなりに増やせるかも知れないけどする気はあんまり無いわ

転生者のあなたなら名前でわかると思うけど戦闘機人で、マスター  
 ってのはスカリエッティの事よ」

「半分は予想出来ていたけどまさかスカリエッティ側で戦闘機人だったとは・・・予想外ね」

まあ普通に考えればただ介入してスカリエツティ側にいるって考えるのが普通だよな

まさか戦闘機人になってるなんて想像はあまり出来とは思えない

「じゃあ他の転生者について教えるね」

二人とも男

片方は神城 祐

見た目イケメンで持てるけれども内面は酷い

なのは達を物としか見ていないのか発言がキモイ

俺の嫁みたいな発言してるから皆避けてる

能力は無限の剣聖、容姿端麗、身体能力が練習次第でどれだけでも上がるっていう3つの能力

俺自身も能力者と話しかけたら教えてくれた  
ただ一言一言がキモかったからまじで嫌い

もう一人は霧崎 蓮

見た目は普通よりカッコイイ人だね

リリカルなのはの原作自体を知らないけど巻き込まれた人  
能力は魔力ランクSSS、身体能力が少し良い、それと転生後に性能のいいデバイスを手に入れるらしいよ

彼はなのは達を支えたいから原作介入する気満々

でも原作を知らないからどうやって介入するのかは知らない  
因みになのは達には好かれててもう一人の転生者には嫌われてる」

一人目は案外楽に倒せるわね

あげた身体能力は私の能力で完全消滅出来るから終わったも同然  
もう一人は闇討ち出来れば簡単だけど恐らく高町なのは達と行動することが多いと思うからそいつ等を倒してからじゃないといけないのが少々厄介だな

「情報ありがとう、で、あなたは私の立ち位置を把握できて何がうれしいの？」

「原作介入はあまりしたくないんだけど管理局自体には少し興味あるから管理局には入る予定」

「なら4年後に戦うことになりそうね、まあ私達には勝ち目は薄いかも知れないけど」

「あなたが隙間の能力を持っているなら即効で管理局が負けそうだ

けどね」

「さあ、どうでしょう?」

実際ロストログアを大量所持しているからそれ使えば管理局なんて即効で消滅するんだけどね

其処のところの判断はマスター次第かな

「有益な情報ありがとうね、じゃあまた今度」

「あ、そういえば今日泊まる所あんの?」

ん?何言ってるんだろ?この子

「隙間の中で寝れば問題ないわ」

「あ、そっか・・・」

歯切れが悪いわねえ

「どうしたの?言いたいことがあるなら言いなさい」

「あの、今日一日話し相手になってくれない?俺友達少なくてさノノノノ」

この子ww可愛いww

「男の娘にそんな照れながら言われたら断れないわね、いいわ話相手になってあげるわ」

「本当！？ありがとう！！」

一日位いいか、別に

変なことされる訳でもなさそうだしされる気もないしね

転生者同士なら積もる話もあるだろう

少し楽しみだな

着せ替え人形になるその日まで 修正しました（前書き）

できれば4日か3日ぐらいで更新したいなあとか思ってるけど多分無理ぽいな

俺だし

でもそのかわり毎回3000字は越えるようにしますので

3日4日過ぎても更新無いときはネタが無いかサボタージュしてるかのどちらかですw

## 着せ替え人形になるその日まで 修正しました

現在さとりの家なう

さとりに誘われたのでさとりの家の中で話してるんだけど、聞けば聞くほど可哀想に思えてきた・・・

なんでもこの容姿のせいで虐められてる（一部の者には現在進行形らしい）。だけでも流石に転生者だけあってメンタルは強いから泣くことなく虐めにも屈しなかったそうだが、その虐めに他の転生者（神城）も参加したせいで歯止めが効

かなくなっかなり困っていたらしい。

そのいじめのせいでなのは達と仲良くなったらいいのだが（神城という転生者が虐め始めたため助けに来た模様）、さとり自身はあまり原作メンバーには関わりなくなかったらしいから寧ろBADな方向に進んでいると嘆いている

他にもさとりは普段言える友達がない為、私に言い続けた。歩いていたら目の前にジュエルシードがあつてそこから去ろうとしたらジュエルシードが発動して巻き込まれたり、魔力持つてるせいでAsに無理矢理介入する羽目になったり（ヴィータのせい）と色々な事をずっと私に喋り続けていた。

御蔭で私的には少ないながらも情報が手に入つたので嬉しいのだが、同情せずにはいられない状況になってしまった

そして泣きながら「明日も付き合って」と言われてしまいその場の雰囲気流されてしまい首を縦に振った

てか、男の娘にそんな風に言われたら頷くしかないでしょ

クッ！！本来ならもう用事無いから帰るかミッドによって何か御見上げでも買っついていこうと思ったのに・・・まあいいや、一日しか経ってないしまだ時間はある

もう一日ぐらいいいだろう

とりあえず今日は寝よう、うん。明日は恐らくさとりには振り回されるだろう

[illegible]

ん？何処で寝たかって？隙間の中に決まってんじゃん。さとりの家で寝るなんて事流石にしないよ

そんなことはどうでもいいや。

隙間を開いてさとの部屋に繋いだ

「さとり、おはよう」

「ん、おはよう……」

まだ寝ぼけているみたいね

「ほら、シャキツとしなさい。私に付き合っつて言ったの貴方なんだからちゃんとしなさい」

「わかった、着替えるから待ってて……」

はあ、取り合えず着替えている姿でも写真に撮るか・・・

マニアには結構な値段で売れそうだしね、といっても私はお金が無

尽蔵にあるようなものだから別にいいんだけど売ることには別の意味があるのよ

例えば高町なのは等に売るとか・・・ねw

正直会いたくは無いのだけど、その内会うかもしれないからその時回避する方法があるのならコレしかないと思う

さとの話を聞く分には明らかになのはが好きなのはさとりだ、それと恐らくはやてもそうだ。さとりはなのははやての話をする時いやそうな顔しながら「頭をすぐに撫でてくる」や「自分をみたらすぐに抱きついてくる」、「人気な無い場所だと襲ってくる（性的な意味で）」等の発言があつた

正直効いてるときは恐怖すら覚える内容だった

そしてさとりは相手の心を読めるからなのはやはやてが自分の事好きなことは理解しているが、原作にあまり関わりたくないといううちちやい考えのせいで少し避けている節があるらしい

それに二人の行動は段々大胆になってきたため少し引いてるらしい

モテてるのに避けるとか・・・ムカツクンダヨ！！私だってそういうことしてみたい！！・・・元男の俺は男と付き合えうのか・・・？無理かもしれない・・・さとりみたいな可愛い子なら全然okかもしれないけど正直普通の男は無理かも・・・あ、でも最近イケメンいるとたまに惚れそうになるんだよね・・・これは心は男でも体や脳は完璧に女だから心まで女になりかけてるのかな・・・それは最悪の事態招きそうだから考えるのはよそう・・・

「着替え終わったよ、出てきていいよ」

「わかったわ」

よかった・・・さとりに呼ばれなかったら今頃考えないようになっても考えちゃうパターンに入るところだった・・・

「さて、じゃ少し待ってて」

「また待つのか？」

「直ぐに済むから」

とととと歩いていった。携帯電話を持ちながらどこかに電話するのか？ 少しいやな予感がするんだけど・・・気のせいかな？

- - - - 数分後 - - - -

「じゃあ行こうか」

「その前に朝御飯食べてもいい？ お腹が減って」

起きて直ぐにこの子を起こしたのだ、飯なんて食ってもいないし用意する時間もない

「大丈夫、行くところでご飯食べれるから」

「そうなの・・・なら良いわね」

「じゃあ改めて、行こうか」

- - - - 少年少女移動中 - - - -

「着いたよ」

オイオイ、マジですかい。嫌な予感しかしないんですけど・・・”みどりや”とか絶対に来ちゃ駄目でしょ

「私急用を思い出したわ、じゃあね」

右手を振って後ろを振り返り戻ろうとした  
だが、案の定私の腕はさとりに掴まれていた。

「いいから、大丈夫だって。さ、入ろう？」

——カランカラン——

「あ、さとりちゃんいらっしやい」

「桃子さんおはようございます」

「その子がさとりちゃんが言ってた子ね、じゃコッチに来て」

「あの・・・すみません、話が見えないんですけど・・・てか怖いんですけど・・・」

やっぱ、さとりに 트레이チ って言わないでって言うの忘れてた。  
念話しないと

——さとり、私の名前は呼ばないでね——

——ん？なんで？——

——この人たちは解らないだろうけどもし他の転生者が聞いたなら  
私が戦闘機人だと断定される可能性があるし、高町なのは等に聞か

れたら未来で少々不味い事になりそうだから――

――そっか、わかった。じゃあ八雲 紫って呼ぶね、それなら間違えなさそう――

――それで良いわ、よろしくね――

私の名前、トレディチは普通に聞いても解らないかもしれないが名前は番号だ。高町士郎などに聞かれたらどうせあいつのことだから直ぐに番号だと気づくだろう

そして高町なのは言ってしまう可能性がある

そんなことになればマスターに迷惑が掛かるかもしれない。私の番号は13番、最低でも13人の戦闘機人がいるのではないか？という疑問を持つ可能性もあるからどうにかしてでも避けたい道ではあった

「えと、さとりちゃん、この子の名前はなんていうんだっけ？」

「あ、八雲 紫さんです」

「はじめまして、八雲 紫です」

「はじめまして、高町 桃子です。じゃ早速んだけど」

「すみません、マジで何をするんですか？」

「あれ？さとりちゃんから何も聞いてないの？」

さとり・・・お前何を企んでいる・・・

「何も聞かされてませんが・・・」

チラッとさとりの方を見る。顔を右に傾けながらあれ？とか口にしてやがる！！この子完全に惚けてる！！なんて怖い子なんですよー！！

「あれ？言ってなかったっけ？」

「言っていないよ、目的地が飲食店という以外には」

「そだっけ？ごめんごめん」

ムカツク・・・可愛いから余計にムカツク・・・

「で、私は何をするために連れて来られたんですか？」

「ここで働くために連れて来たんだよ」

・・・へっ？

「意味がわかんない・・・誰か意味を・・・」

「紫さんなんか暇そうだったしこついうのもいいかなって思ったから」

「良くない！！何で君はそういうことを・・・」

「それに僕は毎日此处で働いてるから今日休む訳にはいかないし、紫さんは暇そうだからどうせなら一緒にと思ってね」



うなんだが・・・」

「そうかもしれませんね、あの子根は真面目ですからね」

スカリエッティはコーヒーを飲みながら近くで仕事をしているウーノと話していた

トレディチがいらないからといって別段何かがあるわけでもない、強いて言えばご飯を作るのがウーノしかいないためウーノが一週間頑張っている程度だ

チンクモトーレもレリックを探しているので今はクアットロしかない

クアットロも自室で何かをしているらしいが、別にいつもの事だ

「それにしても平和だねえ」

「平和なんてその内私達が壊すのですからこの平和を楽しむくらいはいいですね」

「そうだね、ウーノ」

「はい、ドクター」

なにも言うことの無い空間が広がっていた  
ただそれだけであつた

平和を堪能している二人はトレディチが今そんな目にあっているかも知らずに

着せ替え人形になるその日まで 修正しました（後書き）

誤字脱字、此処はこうしたほうがいい等という意見がありましたら是非お願いします

参考にして出来るだけこの作品をいい作品にしたいので

よろしく御願います

## 決断と別れ（前書き）

正直この話は自分が最初書いてたのと180度違う話になってしまったのでひどいと思う

自分でもなんでこんな風にしたんだろう？って思ってるぐらいですw

## 決断と別れ

私は今とある部屋にいる

その部屋にはたくさんのお洋服があった。その部屋のお洋服を見た時は目眩が私を襲った。その洋服は普通の洋服ではなく俗に言うコスプレ（・・・）と言う物だった

「ねえ、これ着てみない？」

「着ません、そんな露出の高い服」

桃子さんが私にチャイナ服を改造したコスプレを見せてきた。胸元はハート型に切り取られており、パンツが見えてしまいそうな位短いスカートの丈のコスプレなんぞ誰が着るか。桃子さんはそういう服かやたらとフリフリがついている服を私に着させようとしてくる

「この服着てない？」

なんでウェディングドレスなんてあるんですか

「着ませんよ。てか何でコスプレなんてするんですか？前に見た時は此処の人みんなエプロン付けてただけですよ？」

「去年はやてちゃんが一回コスプレして喫茶してみない？って言うたから試しにみんなで作ってみたの。そしたら予想以上にお客さん受けが良くて」

そうか、八神はやてあなたが提案したせいで私が現状にいるんですか。怨みますよ

「またやる必要は無かったんじゃないですか？それに今日じゃなくても他に人がいるときにすれば良いじゃないですか」

「それがね、またやるって商店街の人に言っちゃったのよ。でなんでも今日やるのかは元々皆今日なら仕事ないから空いてるって言ってたんだけど急に用事が入っちゃったのよ。商店街の人にも申し訳ないでしょ？急にやめるのわ」

別に日に移すっていう選択肢はこの人には無かったのかな？

「それにさとりちゃんとうちの娘しかコスプレする人いなくて困ってたの。ありがとう紫ちゃん」

後で、さとりを、殺す、っと

「そういえばさとりは？」

「この部屋入ってからずっと紫ちゃんに着させる衣装を探してるのよ」

お前は私に何を着させる気なんだ？てか此処の部屋にあるコスプレ何着あるんだ？部屋の壁一面にコスプレの衣装とか色々あるぞ？中には高級そうな服まで

「よくコレだけの衣装が集まりましたね、幾ら賭けたんですか？」

「コレ全部貰い物なの、商店街の人たちが渡してくれたのよ」

ああ、あれですね、此処の海鳴は変態しかいないんですね。今日終

わつたらさつさと帰ろう、うん

「あつた！！やつと見つけた！！」

さとりはお目当ての物を見つけたらしい、だが私はそうそう着ないぞ？

「紫さん、見てこの服！！あなたなら絶対に気に入るよ！！」

さとりが見つけたと言って見せてきたコスプレは

原作の八雲 紫の服だった

さとりの顔は満足気になっており少しドヤ顔をしていた。だが私はその顔を見ていない、服をガン見して固まってしまった。なぜこの服があるのか、この服は完全にあの（・・・）八雲 紫と同じ服だ。それも萃夢想の中華風の衣装の方だ

「偶々商店街の人達が桃子さんにこの服渡すの見てたんだ」

「んゝこの服よりももっといい服あるわよ？例えばこの「着ます、さとりが持ってきた服を着ます」あら、気に入っちゃったのかしら？じゃあそれにしましょうか」

- - - - 少女着替え中 - - - -

ぴったりだ・・・私のサイズに丁度合う

「紫さん、ごめんね、どうにかして驚かせてみたかったんだ。八雲紫の衣装なら喜んでくれると思ったんだ。」

「喜ぶわよ？でもこんなことしなくてもいいんじゃない？」

「えと、ごめんなさい」

「何でこんなことしたの？」

正直こんな事はする必要がないと思う。最初からみどりやに八雲紫の衣装があつてバイトしないと着れないかもって入ってくれば心の中で怒らなかつたのに。  
こんな騙すような真似はする必要がないと思うんだけどなあ・・・

「サプライズつてのがしてみたかったんだ」

「・・・へっ？」

「昨日紫さんと話したとき、僕色々な事を紫さんに喋ったじゃないですか、一方的に」

まあそうだね、少し私から話題を作ったりはしてたけど殆ど聞いてるだけだったような・・・

「あの時気がついたんだよね、僕ってよく能力使つて人の心読んで行動してるから其処まで人と話した事が無いって。だから私は普通の人は最低限の会話を、原作メンバーに関しては基本的に避けていたから、みどりや以外では殆ど会話はしなかつたんだ。といつてもみどりやでも会話しても最低限の言葉で直ぐに会話を終わらせてたけど」

つかこの子なんでみどりやで働いてるんだろう？原作メンバーと関わらないなら明らかに此処じゃない所で働いたほうがいいと思う

「話の途中悪いんだけどなんでみどりやで？此処で働いたら原作メンバーに会うなんて考えなくても判ることじゃない」

「僕ね、親がいなくてお金が少し足りないんだ。僕を置いて夜逃げしちゃったんだ。流石に転生者といえど此処の親と思ってた人に裏切られたのは結構傷ついちゃって、それにお金も尽きてきたから仕方なく親同士仲が良かったみどりやに頼んだんだ。他のお店だと中学生なんて普通働かせて貰えないからね」

これは聞いちゃいけない事聞いちゃったかも。流石に予想できないわ、親に夜逃げされて金が無くなってきたからみどりやで働いてるなんて

「ごめんなさい、最低な事聞いて」

「うっん、別にいいよ。さっきの話に戻すけど僕ってそういう行動ばかりしてたから友達って言える人全くないんだよね。だから紫さんと話した時凄くワクワクしたんだ！！別に転生者だからとかじゃなくて単純に僕がまともに会話できた人だから」

この子は原作メンバーと関わらないと決めたときに勘違いして一般人とも関わらないようにしたから友達が余り出来ず孤独になった、と言う所かしらね。可哀想だけど自業自得ね

「だから、サプライズして紫さんを驚かせて喜んで欲しかったんだ。そして友達になって欲しいんだ」

孤独故に孤独を嫌う・・・か、まあいいか少し（・・・）なら

「しょうがないわね、友達になってあげる。あなたの話ぐらいなら聞いてあげるわよ」

「本当！？やったあ！！」

さとりは飛び跳ねながら頬を赤くした

「喜ぶのはいいけど先に仕事済ませちゃうわよ。私達の友達記念でバイト手伝ってあげる」

「うん！！」

そのまま私達はドアを開けて仕事に向かった  
ちなみにさとの服は黒のゴスロリである  
凄い似合っている

-----少女達仕事中-----

仕事は終わった。正直言おう、客の目がキモかった  
どんだけウェイトレスをガン見してんだよ、商店街メンバーキモ過ぎ  
まあ別にいいか、処理はしておいたし

「おつかれさま、紫ちゃん」

「おつかれです、桃子さん」

「どうだった？ウェイトレスは」

「正直言つと少し楽しかったかもです」

「よかった。ハイ、これバイト代ね」

そういつて桃子さんは封筒を渡してきた、光に当たり透けて見えたが札が何枚が入っているようだった

「いえ、バイト代は入りません」

「でも・・・そのかわり」そのかわり？」

「この衣装貰えませんか？」

「え？それでいいのかしら？」

「こっちはそれが良いんです」

寧ろ金貰つても幾らでも金なんて手に入れれるから別に要らないんだけどね

それならこの服貰つたほうが何倍も有益だろう

「そう、ならあげるわ」

「ありがとうございます、では、さようなら）……………」

「紫さん、お疲れです!!」

「さとりもお疲れ、と言ってもあなたにとってはいつも働いてる事にプラスしてコスプレしてるだけなんだろうけどね」

「そうだね、じゃ紫さん、いや、トレディチさん今日も話そうよ」

「それは無理ね、だって私戦闘機人だから仕事しなきゃね」

「そうなんだ・・・ならしょうがないね」

「まあこれでお別れだしね」

「へ?どういうこと?」

「あなたはもう私を忘れる。もう此処の地球で私を覚えている人はあなた一人」

「・・・意味がわからない」

「言葉通りよ、みんな私を記憶から忘れてる。私の能力によって」

そう、皆には気づかれないように隙間結界を作りそこを出た瞬間に結界内での私に関する記憶だけを忘れるようにした。今も張っている。

桃子さんに関しては直接記憶を消しておいた。私と接していた時間が他の人より長いので念には念を入れておいた。私は完璧には隙間を使いこなしていないからね

「トレディチさんは何でそんな事を・・・」

「この記憶を残しておいて良い事はないから、その内情報が漏れてしまう可能性があるからね。因みに能力でやったから魔力痕跡は出てこないわ」

「なんでそんな事するんですか！！折角・・・折角友達になれたのに・・・」

「ごめんね、転生者としてあなたと接していたら私はずっと友達だったと思う。けれども私は転生者でもあり、戦闘機人でもある。故にマスターの迷惑になる部分は出来るだけ排除しなければならぬ」

「なら、殺せばいいじゃないですか・・・」

「その考えもあったでしょう。でも、やっぱり情が移っちゃったのかしらね、殺せないの」

これは本音だ、情が移ったからってのが一番大きい  
本来なら戦闘機人として有るまじき行為だ。だが、私はそれでも殺したくない物は殺したくない

「今度、直接会うような事があつたら、そのときに記憶を戻してあげる。その時には、ちゃんと友達になりましょうね」

「じゃあまた今度ね、さとり」

さとの目は虚ろな目になり動かないでいた  
私はそれを見て隙間を開きミッドへ向かった  
ミッドでは情報を更に手に入れなければいけない

## 決断と別れ（後書き）

前書いたのはさとりと仲良しのままいなくなっちゃったんだけど、やっぱり戦闘機人なら殺すのかな？でもそうなると桃子さんや一般人も殺さなきゃ行けないからな・・・とか思ってた最終的に記憶を消してしまいました

という感じで自分の中で決め付けました

感想のほうにも戦闘機人ならこうするんじゃないかって意見あったので参考にさせてもらったのですが、やはり後々主要キャラにしようかな？なんてやつを殺すのはやはりなあ・・・って感じがしたので殺しませんでした

多分殺したほうがいいんでしょうな・・・

はあ、難しいな、二次小説って

## 新たな仲間（前書き）

年明けに出してみました

けど今回は2500文字なんで少ないです、はい

調子乗りました

ごめんなさい

## 新たな仲間

「おかえり、 트레이ディチ」

「ただいま戻りました」

帰ってきて直ぐに今まで自分が集めてきた情報をまとめたメモリースティックをマスターに渡した

「なんだい？ コレは」

「私がお暇を貰つてるときに管理局や地球に行きまして、その時に得た情報を。 コレは管理局のというよりは私が将来危惧している人達の特徴をまとめた物です」

「ふむ、 高町なのはやフェイト・Ｔ・ハラオウン、 八神はやて、 神城 祐、 霧崎 蓮か。 ドウエエからの情報の中にもあつたけど此処まで詳しくは無かつたな、 どうやって調べたんだい？」

「隙間を使って・・・の一言で終わるか」と

「君のＩＳは計り知れないね、 あまり準備出来ていない今の状態でも管理局を落とせそうだ」

実際私が隙間を使って攻撃すれば出来そうな気がするが何処までが可能なかを把握できていない現状で行うのは少し危うい  
実際出来ない事があってそれをしなきゃいけない場合解決が出来ない。 そうなると管理局を落とせない可能性がある、 なら完璧にしないからが一番だ。 言わずとも

「そうだ、トレディチに伝えなくちゃいけない事あるんだ」

「ん？なんででしょうか？」

「君に新しい姉が出来たよ」

姉？ああ、他の戦闘機人が出来たんだ

「今その子の所に案内するね」

マスターが席を立ちどこかへと向かったからそれについていった

- - - - 少女移動中 - - - -

「この子が君の姉のNo.6セインだ」

ふむ、戦闘機人は順番通りにでも出来るのかな？なら次は7番目のセツテの可能性があるな

「初めまして、No.13のトレディチです」

「セインです！！これから宜しく！！」

「元気な姉ですね」

「えへへ、どういたしまして」

元気だねえ、ナンバーズの中ではかなり元気な方と話では聞いているんだが・・・本当っばな

「この子は君程ではないが結構良い能力を持っていてね。ディープダイバーといって壁や地面を通り抜けられる能力を持っているんだ」

「それは凄いですね」

「トレディチが言っても嫌味にしか聞こえませんか」

ウーノ姉さん、それは言わない御約束です。

「本来必要なメンバーは揃っていたからばち考えていこうかな？なんて思っていたらウーノが培養液の検体の中で珍しい能力を持った子が出来たと言う話を聞いてね、稼働させてみたんだ」

「それがセイン姉と、了解しました」

セイン、固定武装が無くてもISを発動させる事が出来る戦闘機人本来ならありえないのに突然変異によって本当のISが消えディープダイバーが生まれた

ディープダイバーは隠密行動に長けているためこの先私が他の任務に出ている間はこの子が使われる為かなり重宝されるな

「これから宜しくね、トレディチ」

「宜しく願います、セイン姉さん」

これから段々とナンバーズが増えていくのかな？賑やかになりそうだな

「因みに明日か明後日にはN.O.10が稼動する予定だから」

「セインと一緒に稼働させなかったんですか？」

「それはトーレが遠距離後方支援型砲撃士が欲しい、とセインが出来た後に言ったから適正のある子を昨日から稼働させる準備に取り掛かっているんだよ」

「そゆこと、ってかNo.10って事はディエチじゃないかな？」

「たしかウエンディはNo.11だったはずだし中距離型だったはずだし」

「因みにセインとその子のお世話はトレディチ、君に任せるから」

「ええ！？何ですか！？私より姉達さんの方が適任でしょう」

「いや、ウーノはもう少しで手が離せない状況になるしドゥーエはいないし、トーレは無理だって言うてくるし、クアットロは適任ではないし、チンクは妙に任務に熱心だから出来なさそうなんだ」

「ウーノ姉達はわかるけどチンク姉は何がどうした？あの人が一番適任ばいのに」

「チンク姉には何があったんですか？」

「妹には負けてられん！！って叫びながら任務に行ってたよ。多分実績が妹よりも低いのが姉として嫌なんだろうね」

「チンク姉無駄に頑張るなあ、此れからも色々頑張らなきゃいけない事あるのに」

「まあレリックとかに関しては私が持つてくる事になるから主にチンク姉達が管理局員に対する妨害活動や邪魔な施設破壊が主だと思う」

けどね

つか妹の教育ほったらかして何任務に勤しんでるのさ

仮にも姉だろ

はあ、しょうがないか

「わかりました、日常的な事のお世話はやりますが戦闘的なことに  
関しては私はあまり向いてないのでやりませんよ」

「それでいいよ、お願いするね」

「と、いうことでこれからお世話します。宜しくお願いします」

まあ基本的な事は私が教えてほかの事は藍に任せればいいや

面倒くさ・・・ゲフンゲフン、戦闘とかに関しては私より藍や  
トーレ姉の方がいいだろ、私よくよく考えるとちゃんと戦闘した事  
なんて戦闘機人になってからだと2、3回かな？私のIS隙間だか  
ら、使つてるとそうそう固有武装を使う機会が無いんだよね

隠密行動みたいな感じだし、いつも敵を倒す事考えず時の境界を弄  
り全てを止め、誰にも気付かれず目的を遂行するのが私の基本的な  
戦闘パターン

前に戦闘しなきゃ行けない時が来ちゃってその時に、相手の動きを  
止めて固有武装で一方的に打ちのめしたただけである

悲しい戦法だけど私は正攻法で戦う気はあまり無い

正直いくら戦闘機人にされ体が強くされたからって、空飛んで魔法  
打ってくる魔導師と戦うにはそれなりの戦略が無ければ私は正攻法  
では勝てないと思う

今の私は戦闘機人になる前に鍛えていたとしても実戦経験は乏しい  
からね

私は戦闘訓練もそんなにしてないから、ちょっと鍛えた人と戦って

も私負けるのかもなあ

そんな私が戦闘の事に関してとやかく言えるはずがないので、戦闘経験の豊富そうなトーレ姉や藍に任せて置いたほうがいいし私も楽でk・・・何でも無いや、とりあえず任せよう

「セイン姉、日常的な事に関しては私が全部教えます。戦闘などに関してはトーレ姉か藍にお願いします」

「藍って？」

「ロストログアで私に仕えている者です、その狐耳と九尾を持つた子です」

セイン姉はチラッと藍の方を見、藍はそれに対してお辞儀をした

「藍お願いできる？」

「可能な限りやり遂げて見せましょう」

「ありがとう、じゃあ此処での生活と基本的な事をお教えます」

「お願いね、トレディチ」

さて、何から教えますことやら

## 新たな仲間（後書き）

戦闘機人出す順番はとあるサイトに乗っていた通りに出す予定で  
セイン↓デイエチ↓起動六課前後にノーヴェ、ウエンデイを同時起  
動↓JS事件一ヶ月後にセツテ、オットー、デードを起動  
という風にしたいと思います

因みにセインとデイエチに関しては起動する時を作者が知らなかつ  
た為でしたが、ご都合主義という事でお見逃しください  
次はトレディチに関する設定でも書こうと思いますゆえ

今年も宜しくお願いします

今年は頑張りたいと思っています！！

## 転生者達の設定（前書き）

転生者の設定のところに能力と神に与えられた力と分けられていますが、分けている理由は能力はアニメ等や作られた能力で神に与えられた力というのは身体に関する事、又は与えられた武器等で分けた物です

特にコレ！！と言ったものではないんで特に気にしなくてもおkですw

## 転生者達の設定

名前：トレディチ

能力：境界を操る程度の能力

転生者の神に与えられた力を消す能力

与えられた力：最初っからそれなりの力とそれなりの不幸を持って  
転生

魔力保有量：Cランク

年齢：14歳

性別：女（前世男）

人種：戦闘機人

容姿：東方の八雲 紫と同じで原作のような見た目12ぐらいではなく20歳ぐらいの見た目になっている（原作より大人びた感じ）

備考：神によって転生させられた4人の転生者の内の一人

リリなのの世界に転生したが直ぐ死んだ

現在は戦闘機人になっている

神の暇つぶし（神の駒）としてリリなのの世界に送り込まれた人間  
リリなのの世界に来てその世界の親に育てられ一般的な女の子として  
育てられてきたが、学校の行事であった管理局見学の際に乗った  
バスにレリックが入っておりそれを狙ったスカリエッティの作った  
戦闘機人トーレにより襲撃され主人公が死んでしまう

だが、神に与えられた力の最初っからそれなりの力とそれなりの不幸  
を持って転生という物のせいでレリックと融合してしまいトーレ  
に回収され戦闘機人として改造された

他の戦闘機人と違いスカリエッティに対して絶対的な忠誠は最初から  
持ち合わせてはいないが、従おうと思う気持ちのみでスカリエッ

ティをマスターと敬称している

性格はどんな場合でも敵を自分より下に見ず、確実な戦略を経てて相手を確実に倒しに掛かる。その為なら手段を選ばず残酷な行為であつても一番確実な手段ならそれで相手を仕留めに行く

戦闘機人になつてスカリエッティが脳を操作して暗殺や戦闘に関する事に関しての感情等を消したため、殺人等をしても一般人のように後悔や嫌悪等が現れる事は無い

だが、スカリエッティも娘に対して鬼にはなれない傾向があるため余計な感情全てを消す事は出来なかった（愛情等の感情）その為最低限の感情は持ち合わせている

スカリエッティからよく与えられている任務はレリックとロストロギアの回収

戦闘系の任務は 트레이チ 本人が嫌がつているのでスカリエッティ自体も無理強いしないでいる

戦闘機人なりたての頃は心の中が男口調だったが、いつの間にか女口調に変わっているという

名前：古明地 さとり

能力：心を読む程度の能力

動物に愛される程度の能力

与えられた力：身体能力が全てMAX

魔力保有量：Sランク

年齢：14歳

人種：人間

容姿：東方の古明地 さとりと瓜二つというか其の者つといったほ

うがいくらいである

性別：男（男の娘）

備考：見た目が男の娘なので小さい頃虐められていた

原作に関わらないように行動するが巻き込まれてしまう系の  
テンプレ転生者

なのはとはやてはさとの事がすきである

トレディチと同じく神の暇つぶし（神の駒）として送り込まれたが  
気付いていない。小さい頃から虐められ、心を読み、人を避けて行  
動してきたため友達と呼べる人があまりいない。ただ、中学に上が  
ってから虐めは減っているがその代わりファンクラブなるものがで  
きてしまった。本人は容姿をよく気にしているのでファンクラブの  
存在をよく思っていない。容姿が可愛いからという理由でファンク  
ラブが結成されたためである。

なのはが小さい頃の公園イベントに立ち合わせてしまったので、放  
つて置けなく仕方なく泣き止ませたら惚れられてしまった。はやて  
に関しては幼馴染という裏設定。昔からはやてはさとの事が好き  
である

紫と一時的に仲良くなり涙が出るほど嬉しかったが、紫に記憶を封  
印されてしまったため今はその記憶を持っていない。

名前：神城 祐

能力：無限の剣聖

身体能力が練習次第でどれだけでも上がる

神に与えられた力：容姿端麗

魔力保有量：A＋ランク

年齢：14歳

人種：人間

容姿：イケメン、一般人が見たら一目ぼれしてしまうレベルのかわいさ

性別：男

備考：なのは達を物としか見ていない

発言が一言一言キモイ

うざい

この男はウザイの一言で終わるだろう。前世はよくありきたりなキモオタな為最高の容姿を手に入れた反動でどんな女も自分の虜であると勘違いしており、発言が殆ど上から目線

因みにこの男は神の暇つぶし（神の駒）と知っているがそんなの関係なしで世界を堪能している

自分の周りになのはがいなく、他の転生者のところにいる理由は避けられているのではなく脅されているのだと信じているテンプレートな思考の持ち主

小学校の頃転生者のさとりとなのはが仲良くなっていたのでむかつき虐めに参加して活発化させたが、さとりはそれに屈しなかった為中学に入っても虐めを続けた

そのせいで学校の生徒からは評判ガタ落ちである

本人は気付いておりません

名前：霧崎 蓮

能力：無し

神に与えられた力：魔力ランクSSS

身体能力が少し良い

転生後に性能のいいデバイスを手に入れるらしいよ

魔力保有量SSS

年齢14歳

人種：人間

容姿：イケメン、上の下くらいのイケメン

選別：男

備考：原作を知らないってか前世アニメ自体に興味が無かった

彼はなのは達を支えたいから原作介入する気満々だが原作を知らないからどうやって介入するのか考えていない

フェイトと恋仲、付き合っていたりw

原作を知らないけどフェイトやなのは、はやてを支えて行きたいと思っている。だが、原作を知らないため行き当たりばったりな行動ばかりで空回ってしまう事も少々ある。フェイトと恋仲でフェイトが執務官を目指しているので一緒に執務官を受ける予定（一応試験は一回で受かるほどの実力を備えている）

神からは特別な能力を貰っていないため不利に見えるが魔力量とデバイスの性能でそれをカバー出来るほどであるが、如何せん実力がまだ伴っていないため現時点では転生者の中では下から二番目。一番したはデバイスすら持っていないさとりである。デバイスを持てばさとりが上から二番目になるレベルである（能力的に）

補足だが、学園では男子で一番人気がある

カッコイイだけではなく優しさも持ち合わせており成績も優秀なためモテまくっている

だが、フェイトと付き合っているため告白されても全て断っている

## 転生者達の設定（後書き）

自分なりに考えたオリジナルの主人公にテンプレな転生者三人を組み合わせてみようと思って作った転生者達なんですが・・・微妙な気がしてきた・・・

日常？なのか？（前書き）

アンケートとります！！  
詳細はあとがきにて！！

日常？なのか？

はい、みなさんおはようございます、こんにちは、こんばんは、トレディチです

セイン姉達の御世話を開始してから二週間経ちました

因みにセイン姉さんをお世話してから数日でデイエチ姉が稼働したので一緒にお世話しました

最低限の知識は入っているようなので私は此処での暮らしを教えてあげました（それ以外は特に教える事無かったので教えてません）戦闘については基本的にトレ姉が教えた。知識はあっても戦闘経験がないセイン姉やデイエチ姉にとって地獄なんだろうなあ・・・とか思いつつ一方的にやられて少し涙目になってる姉二人を見ていた途中でセイン姉が「トレディチって強いの？」って言うてきて2対1で戦うハメになりました  
当然勝ちましたけど

ん？戦った最中の事？IS使って空間の境界を弄って見えない壁使って焦った所に固定と移動の境界弄って絶対に動けないようにした後、見えない壁消して一歩的に固有武装を使ってボコボコにしただけです

動けない状態の姉達に向かって腕を向けたときに絶望的な顔をしていたのは滑稽ですw

私の基本戦闘はこんな感じですね、だからズルイと言われても知りません。戦闘機人同士の戦いなものだから文句は言わない

「トレディチもつと正々堂々と戦って！！」

「セイン姉はIS使って戦ったら結構正々堂々じゃないですよ、私と同じですよ」

「起動したばかりの私達は戦い方を知ってるだけであって実際に使ったことはないのでもいいんです」

腑に落ちないなあ、でもしうがないのかなあ・・・

「文句言ってるのセイン姉ですよ？」

「デイエチからも何か言ってあげてよ！！」

デイエチは自分に振られるなんて思っていなかったのか顔がすんごく驚いている

「えと、セイン姉がトレディチの実力を調べる為に戦ったんだからトレディチが全力を出して戦うのに文句の言いようがないんじゃないかな？」

「あ、えと、そりゃそうだけどさ・・・」

セイン姉マジ可哀想、今周りに味方がいないなんて・・・あ、責められてるの私だから同情なんてしないでいいか  
それに長く続くと面倒くさいからね

「そろそろ私は料理作りにかからないといけなので此処で」

「わかった、じゃあセインとデイエチは飯まで特訓だ。異論は認めない」

さて、今日は何作ろうかな？人数も増えてきたし多めに作らないとだね、藍に手伝ってもらおうと

- - - - 少女料理中 - - - -

まあ特に凝った物は作らなかったですよ

期待してた人、料理は日常的には作っていますが簡単にレシピ覚えて作ってるだけでなんで味付けも感でやってます

よく転生者は料理作ったらうますぎて女の子が自信なくす、とかあるけど実際そんなの作れるなら料理人になれて話だな、私的には

「それじゃあ皆此処にいるしそろそろ話しておこうかな」

マスターが急に話題を振ってきた

ちなみに今皆食卓に座っている

「僕達が管理局に攻めるのは知ってるよね？そのときの為までにリックは最低でも後5つは欲しい」

皆ゴハンなんてなかったかのように話を聞く体勢になっている。冷めちゃうから料理作った本人としてはゴハン食べてからにして欲しいんですけど・・・駄目なんでしょうか？駄目なんだろうなあ・・・  
・マスターは食事と召集以外で基本的に私達の前には来ないからなあ、研究に没頭してるし

「それと基本的にはこれからの計画に邪魔になる研究所等を主に破壊してもらう事になると思うから十分に気を付けて欲しい。君達が一人居ても欠けちゃうと計画に差し障るから絶対にはないようにね」

「「「「「はい」「」「」「」」」」

その場にいる戦闘機人ウーノ、トーレ、チンク、クアットロ、セイ  
ン、ディエチ、そして私が一斉に返事した  
マスターはいつも思うが非情になりきれていない

原作を見ても思った。何故管理局を倒したいのに戦闘機人のいらな  
い感情を殺さなかったのか

さっきの話は聞けばこれから危険な任務をすることになるけど死な  
ないでくれといってるようなものだ、どうせなら捨て駒にでもなっ  
てくれと言ったほうが戦闘機人として楽になれると思う。その方が  
任務にも非情になれるし割り切れる  
そんなものでは勝てる戦も勝てなくなりますよ？マスター

「ドクター、私達はあなたのおかげで今があります。ですから絶対  
に成功させて見せます」

チンク姉が先陣を切って喋り始めた

「ありがとう、チンク。さあ、ゴハンも冷えちゃうし食べようか」

マスター、色んな意味でありがとう。ゴハン冷めちゃうから本当に  
早く食べて欲しかったんだ。今日のゴハンはスープカレーだから冷  
えたら美味しくないんだよね

それにあのままだと飯食うの遅れてなんかしちゃうパターン入りそ  
うだね

「では、いただきます」

「 트레이チって妹って感じがしないんだけど」

「 急になんですか？セイン姉」

「 いや、チンク姉やトーレ姉は姉って感じはするんだけど 트레이チは妹って感じがしないんだよね」

「 そういわれればそうだな」

何一緒に乗ってきてるんですかチンク姉

「 じゃあどんな感じがするんですか」

「 どちらかというと・・・姉みたいなの」

「・・・なんでですか？」

何故姉みたいに思われるんだ？

そんな行動は取ってないと思ってるんだけどなあ・・・まさかこの体は東方の八雲 紫と同じような体と言う事だから・・・まさか B A 臭がするとかそんなんじゃないでしょうね！！

「 何故・・・姉みたい・・・なんですか・・・？」

セインの右肩を握りながら聞く

「イダダダダダ！！トレディチ落ち着いて！！お願いだから！！」

「これが落ち着いていられるかぁ！！」

「まてトレディチ！！取り合えず話を聞こうじゃないか」

そうだ、違つかもしれないから一旦落ち着こう・・・もし思ってた通りなら確実に隙間落としてやる

セイン姉の右肩を握っていた手を退けた

「え、えとトーレ姉やチンク姉と違って料理作るし、話よく聞してくれるし相談乗ってくれるし困ったら何かと助けてくれるし」

あ、そゆことが、何か勘違いしていたみたいだわ

「ふう、そういうことねなら「ちょっとまて」ん？どうしたんですか？トーレ姉」

「その話を聞いていると私やチンクが姉らしくないということなのか？」

「え？いや、違うよ！？トーレ姉やチンク姉も姉らしいよ！！でもトレディチは妹らしくないって事だよ！！ねえ！！ディエチ！！」

「え？えと・・・えと・・・」

急に振られて驚いてるな、この子はこう言うキャラなのかな？

「一般的な目から見ればトレディチが姉に見えてもしょうがないかと、家事的なことは私達はせずに任せている部分がありますし」

おお、冷静に流した。この子はきつと将来すごい子になるんだろうな  
ん？一般的な目から見たらだよね・・・面白そうだ

「チンク姉は一般的な目から見たらどうなの？ディエチ姉」

「ええ！！チンク姉は・・・その・・・あの・・・えと・・・」

「どうした、言ってみろ、姉として全部受け止めてやる。どんな事でも」

無い胸張っていうチンク姉、この先何言われるのやら

「あと、一般的な目からすると・・・多分ですけど・・・あ、姉です  
ね！！その姉らしい風格と威厳を聞けば誰でも姉だと思いますよ」

「うむ、そうだよな！！」

あははと苦笑いしながら冷や汗みたいな物をたらしているディエチ姉

「セイン姉はどう思う？」

「え？私？」

此処で嘘言われても楽しくないから境界弄って嘘付けないようにな  
ところと

「私は妹って感じがするなあ、体系とか小さいし、休んでるときとかはもう後ろから抱きしめたくなくなるくらいだね」

「・・・・・・・・・・」

ナイスセイン姉、私は妹として正直者な姉がいてくれて本当にうれしいよ！―さて、証拠隠滅の為に境界弄って直しておこう。これ以上喋ってずっと本当のことしか喋らなかつたら逆に疑われちゃうからね

因みにチンク姉は顔面が真っ赤です

「セイン、お前がどれ程私の事を思ってくれているのかよくわかった・・・」

「へ？」

セイン姉は今だに自分は隠し通したと思っているらしいからちょっと教えてあげるか

セイン姉の後ろに移動してっ

「セイン姉はすごいね、チンク姉が一番気にしている所の体系について言っちゃうなんて」

「え？私はそんなこと言っただけ無いただけど・・・」

「言ってたよ？思いつきり。頭の中で考えてること間違えて言っちゃったんじゃない？」

「嘘！！嘘でしょ！！」

「セイン!!」

おお、こわ、チンク姉がコメカミヒクつかせながらセイン姉のほうを、いや、セイン姉しか見ていない

これは危ない自体になりそうだな？でも後悔はしない（キリッ

「少し話し合わないか？勿論訓練場でだがな」

「え！？いや、遠慮してお「いいから来い!!」」ISディープダイバー!!」

「コラ!!逃げるなセイン!!」

元と言えば私のせいなのかな？いやでもいいつか。私には被害無いし

後々コツテリ全てを吸い取られたかのようなセイン姉と「私は姉だ・

・姉なんだ・・・」と復唱するチンク姉が発見されました

## 日常？なのか？（後書き）

前書きで書いたようにアンケートとりたいと思います

### 2 択です

これから管理局と戦いますが捕まるかどうかです

### 1 捕まる

管理局と戦い捕まる↓そしてナンバーズと共にお仕事しながら転生者関連の話を書くことになると思います（転生者関連の事書いたらネタなくなるからしばらくネタ考えるために投稿しないかも、おそらく2月末から投稿が少なくなるかと）

### 2 捕まらない

管理局と戦いトレイダだけ捕まらないエンドになります  
捕まらない後はスカリエッティに命令された最後の任務に取り掛かります

その途中で魔法戦記リリカルなのはForceに突入+介入することになると思います

恐らく話的に1よりはこっちのほうが長くなると思います

どちらも一応作者は考えていますのでどうしようか悩んでいますので出来ればアンケートお願いしたいです

期限は1月10日までにします

何卒アンケートにご協力ください

## 降臨せし姉（前書き）

アンケート結果が2多すぎて笑いました  
殆どの皆が

負けるところが予想できない  
という意見でした

まあ能力が能力ですからね、そうそう負けないでしょうね  
負けるとしたらワザと負けるぐらいしか出来ないうすしね

## 降臨せし姉

side ウーノ

「……………」

「ウーノ、そっちはどうだい？」

「特に異常はありません」

スカリエッティとウーノは戦闘機人の強化プランについてないよう  
を整理していた

どこかに無理な部分があれば報告し、直すという作業を此処一時間  
やっている。特に異常は無く作業は快調に進んでいた

仕事が一段落したところでウーノはスカリエッティの予定を確認す  
るために予定表を開いた

「……………あ」

「ん？どうしたんだい？」

「いえ、今日は彼女が帰ってくる日でした」

「ああ、そういえば今日は彼女のメンテナンスの日だったね。忘れ  
ていたよ」

「てことは他の皆にも報告してないのでは？」

あの子の性格上先に来ること教えてあげないと皆への被害が甚大だわ

「まあ大丈夫だろう」

「……ドクターがそういうのであれば信じましょう」

今私に出来ることは作業を早めに終わらせて彼女のメンテナンスを  
してさっさと帰らせることね

じゃないとあの子達が危ないわ、特にチンクと新しく稼動した子達が

side トレディチ

今日は何事もなくゆったりとした時間が味わえる

最高な一時だ。姉達は任務は此処最近はないらしくゆったり過ごし  
たり訓練している

まあ訓練してるのはトーレ姉とセイン姉とデイエチ姉なんだけどね  
(半ば強制的に)、まあ稼動したばかりだから教えなきゃいけない  
ことが多いだろうから訓練は多いに越したことはないよね。私はト  
ーレ姉の訓練は基本的に逃げてましたが私は別ですか(笑)

さて、コーヒーでも飲もうかな？

「藍、今何かしてる？何もしてないならコーヒー頼みたいんだけ  
ど」

……シーン……

あれ？さっきまでそこで一緒に寛いでた筈なんだけど……何処か

に行っちゃったのかしら？

「らっん？らっん？」

振り向いて見るけどいない・・・本当にどこ行ったのかしら・・・

「・・・・・・・・！！！」

「・・・・・・・・！！！」

ん？何か聞こえる・・・誰かしら・・・

今寛いでいる場所を立ち隣の部屋へと続くドアに耳を傾ける。先ほどはこちらの部屋誰かと誰かがしゃべる声が聞こえたからね

「やめてください！！それにあなた誰ですか！！！」

ん？これは藍の声だ

「誰だつていいじゃない、それよりもこの尻尾！！最高ね！！！」

この声・・・ああ、ドウエ姉か、昔会った時は私が稼動してすぐだったなあ・・・あのいい人なんだけど可愛い子見ると抱き付く癖直したほうがいいと思うよ？チンク姉とかガチで嫌がつてたしまあそれに子供扱いするから嫌がつているんだろうけどね

「誰か助けてください！！変な人います！！！」

これは・・・助けようかな？でもこのまま見てるのも楽しいし・・・まあ藍の事だし此処の関係者に対して攻撃的な態度は取らないはずだし

「これ以上私に対して敵対行動をとるなら容赦しませんよ!」

「これはスキンシップだからいいじゃない」

あ、これはもしかして藍が切れちゃうかも知れないパターンだ。さつさと止めよう

「ドゥーエ姉、そろそろやめてもらえませんか？その子の責任者としてこれ以上はやめていただきたいです」

「あ、トレディチだ。久しぶり」

「久しぶりだからって抱きつきに来ないでください」

「きゃん」

抱きつきに来たドゥーエ姉に対して真下に隙間作って逆さまし、頭から地面に落とした

「イッタ、ちょっと、久しぶりに会った姉に対する態度なの？それは」

「ごめんなさい、何故かやってしまいました」

後悔も反省もしません、してたまるもんですか  
おお、よしよし。ドゥーエ姉さんに尻尾触られてしまっって可愛そうですね、後で尻尾にブラシかけて上げるからお逃げ

「.....」

あ、そか、まだドゥーエ姉の事知らないし帰って後でまた襲われるのがいやだから離れないのか  
わかったからそんな涙目で私を見ないで、私まで抱きしめたくなくなるから

「この人はドゥーエ姉さん、ドゥーエ姉こっちの子は藍。ロストロギアよ、報告になかった？九尾の」

「ああ！！思い出した、あの報告書に載ってたロストロギアの九尾娘はこの子だったのね！！ずっと尻尾モフモフしてたから気にしなかったわ」

「まあそういうことなので過度なスキンシップは止めて下さいね、この子が可愛そうなので」

「んゝ、ま、チンクちゃんですその分補うからいつか。じゃあ次チンクちゃんの所行ってくるね」

全く、嵐のような人だ  
前もメンテで此処に来たときは酷かった。私とチンク姉を永遠と抱きしめてきたから怖かった  
まあ私はスキマですぐに逃れたから良かったものの、その後はずっとチンク姉が離されないで生気がなくなっていたからね

「トレディチ様・・・」

「ん？何？藍」

「彼女はなんなのですか？」

「ああ、簡単に言うと諜報活動をしてるわね。ISで顔とか帰れるから潜入する任務に取っておきなよ、だから基本的に管理局に居て偶にメンテナンスで帰ってくるの」

「あの人が毎日居たら私ストレスとかで尻尾が禿げそうです」

「元々はああじゃないって話よ。管理局で長い間妹達に会えなくなつたせいであんな性格になつたってウーノ姉が言つてた」

「はあ……」

「ま、どうせ一週間後には帰っちゃうから其れまでの辛抱よ」

「あの……」

「ん？何？」

まだ何か話してないことあるのかしら……それなりに教えたと思うんだけどなあ

「寝込みは襲わないですよね？」

「襲うわよ」

「え！？」

あの人が無防備な時を襲わないはずがない。私も流石に夜中は狙わないだろうと思って寝たら案の定狙われたからね

あ、藍はもうドゥー工姉に恐怖しちゃったのか、あの程度で。その

うちもつと恐ろしい事が起きるというのに

「あの、一週間ぐらい 트레이チ様と寝ていいですか？」  
逃げたいのか、そんなにも

「良いけど、襲ってこないとは限らないわよ？」

「それでも被害は最小限になると思ひまして」

「まあ良いわよ、別に」

「本当に申し訳ございません」

「しょうがないわよ、じゃあ私はもう少し寛ぐわ」

「なら私も」

「あ、コーヒー頼んでもいい？」

「わかりました、暫しお待ちを」

さて、疲れる一週間が訪れそうだな（主にチンク姉が）

その数分後にチンクの叫び声が響いたそうだ



## 降臨せし姉（後書き）

今回はネタが思いつかなくて急遽書いたから微妙かも  
つか絶対にドゥーエこんな性格じゃないと思う

もっとお姉さんのなキャラだと思っけど話作るにはこうするしかなかった

許してくれ、ドゥーエさん・・・

後一話はドゥーエ姉さんの話だと思いますゆえ、暫し戦闘は無しになりそうです

戦闘を期待している方が居れば、本当に申し訳ない

多分戦闘はストライカーズまでないかと・・・^^；

## また日常（前書き）

今回ネタが無く時間に間に合いそうに無かったので落ちもないクソな話になりました

さすがに書いてて駄目だろって思ったけど、普通にがんばって書いたら投稿があさってになりそうだから諦めましたw

次はちゃんと書きマース

## また日常

皆さん、こんにちは。トレディチです

今日はとても平和で賑やかな日です。こんなに皆が走り回っているのに私には何一つ被害が及ばないなんて、なんて素晴らしいことでしょうか！！

「やゝん、新しく起動したこの子可愛い！！ディエチちゃん抱かせて！！」

「抱きつきながら言わないでください！！それと離してください！！」

そう、賑やかな理由はドウーエ姉が妹達を追いかけているからだ。因みにチンク姉はガチの逃走を始めた

ディエチ姉はドウーエ姉の恐怖を知らなかったのか捕まった瞬間に顔が青ざめていた

セインはまだトーレ姉と訓練中なためいないしトーレ姉が帰ってくればドウーエ姉も少しは収まるからセインに被害は少ないと思う。何故被害が少ないかというと、メンテで管理局から帰ってくるたびにチンクにかまっているせいであるさく感じたトーレ姉が説教をしたためトーレ姉がいる場合は少し収まるのだ

ん？お前は教われないのかって？姉さんはスキマに何度もやられるからもう私に抱きつけないと感じて基本的には襲わなくなったんだよ。まあそれでも確実に教われないわけではなく食事中に襲ってくる

食事中は構うの面倒なので毎回何されても無視してます。そのせいかそのときにしか私を襲わないようになりました

まあぶつちゃけどうでもいいんだけどね

「トレディチ！！助けて！！」

「ディエチ姉、私そろそろご飯の支度しなきゃいけないから構ってられないの。ごめんね」

さて、もう5時だし準備しないとね

「私も手伝うからお願い！！助けて！！」

うーん、手伝ってもらわなくても別にいいんだけど・・・まあ楽なことには越したことないか

「わかりました、助けてあげますよ。ドゥーエ姉、いったんディエチ姉を離してあげてください」

「えー、どうして？」

「いいから、いい者に変えてあげますから」

納得いかないのかブーブーいいながら顔を膨らませてディエチ姉を離すドゥーエ姉

まあそんなの見て私は現在女なので惚れたり顔が赤くなったりはしないのでスルーします

スキマを開いてある者を探す。どうせこの施設の中にいることは明白である。あ、いた。

眼帯をした者の腕を掴みスキマから掬い上げた

「・・・・・・・・へっ？」

本人は気づいていない様だ、何があつたのかを

「チンクちゃんだ！！わゝい！！」

「絶対にバレナイ場所にいたはずなのに何故此处に！！・・・まさか・・・トレディチ！！お前！！」

「ごめんなさい、今日はチンク姉の大好きなオムライス作ってあげますから許してください。ではディエチ姉、料理しますよ」

「あ、うん、わかった」

チンクは急いでこの場から脱出を試みようと考えた瞬間に華奢な腕が自分の腹部へと巻き付くのが見え絶望した  
さつきまで必死に逃げて確実に今日一日は逃げ切れると確信していたのに、その確信は一番下の妹によって打破されてしまったのだ。  
しかもそれはディエチの代わりに売られたのだ  
今のチンクは絶望という言葉一色に染められドゥーエに何されても、胸を触られても抵抗する気力が無くなっていた

・・・少女料理中・・・

「本当によかつたのかな、チンク姉を犠牲にして」

「ならディエチ姉があのまま触られ放題の所にいればよかつたじゃない」

「うっ、それはやっぱり嫌だ」

「なら諦めなさい、それがこの世の摂理」

「なにそれ」

「ごめん、何となく言ってみただけ。藍、チンク姉用に少し大きめのオムライス作ってくれない？」

「今他の作ってるのでそれが終わった後でよろしいなら」

「それでいいわ、お願いね」

「わかりました」

さて、今日はドゥーエ姉もいることだし少し豪華な料理にしようかな？でも少し食いずらいのだと私に対して何かしたときに面倒だわ、少し食べるのが楽なのになしようかな

「デイエチ姉これ切って」

「うん、わかった」

さて、さつさと作りますか、さつさと作り終えればチンク姉も解放されるだろうしね

うん、私姉思いない妹だね。

――少女料理終了――

「本当にトレディチの料理美味しいわよね、管理局でもあんまり食べれないわ。こんなに美味しい料理」

「そういつて頂けると作った甲斐がありました」

そんな良い会話をしつつドゥー工姉は私の背後で腕を伸ばして胸を触ってくる

ご飯食え、そんなことしてないで。冷えるでしょうが

「ドゥー工姉、ご飯冷えますよ。さつさと席に戻って食べてください」

「ん〜ならさつさと食べ終わって食べてる最中のトレディチちゃんの胸を堪能しようつと」

「そんなことしないで良いですから、ちゃんとご飯食べてください」

「いやあ、トレディチちゃんの胸揉み応えがあつていいんだよね、ウーノとはまた違う感じ。チンクちゃんは無いけど反応が楽しいのよね」

あ、チンク姉死んだ、無いつて言葉聞いたときに固まって体が砕けたような感じになつて。南〜無

チンク姉はどうせ将来もちっさく、胸も無いと思うけど遅く生きるんだよ！！貧乳代表として

需要は一部にはあるんだから、チンク姉の容姿は」

「トレディチ、後で訓練所に来い。久々に闘おうじゃないか、殺しあうまで」

「え？何で闘うの？」

「口に出てたわよ、トレディチの思ってたこと」

なんとお！！やらかしましたね、後が怖いです。どうしよう・・・  
確実にボコられちゃう・・・まあスキマ使って逃げればいいか

「チンク姉、ごめんなさい。でも一部には絶対に需要あるから心配  
しないでね」

「死ねえ！！貧乳の敵め！！此処から消えろ！！それに私は将来大  
きくなるんだ！！」

ちよー！！ナイフ投げないで！！お願いだから！！食事中だって！！  
ああ、もう

とりあえずスキマ作って逃げよう。ご飯はスキマに言った後に回収  
すればいいし洗い物も誰かがしてくれると信じて

そのまま真下にスキマを作って座っていた椅子ごとスキマに落ちた

「逃げるなあ！！私と！！闘え！！」

あゝあ、面倒くさいことになったなあ・・・まあ今のことスキマで  
封印しとこ。周りの皆にもかけて置こう

間違えて言ってしまったって記憶が復活したなんて事になったらまた追  
いかけられちゃうからね

さて、封印開始っ



また日常（後書き）

まあ落ちないよね

そろそろキンクリして原作に入ろうかな  
じゃないと話が無いや

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9927t/>

---

戦闘機人物語

2012年1月12日12時36分発行